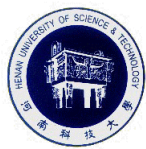


分类号 \_\_\_\_\_

UDC \_\_\_\_\_

密 级 \_\_\_\_\_

编 号 \_\_\_\_\_



河南科技大学

# 硕士学位论文

皇国史观对日本侵略扩张的影响

—以“大东亚共荣圈”政策为中心—

皇国史観の日本侵略拡張戦略への影響  
—「大東亜共栄圏」政策を中心に—

学位申请人：

路红燕

指导教师：

张卫娣 教授

一级学科：

外国语言文学

二级学科：

外国语言学及应用语言学

学位类别：

文学硕士

2022 年 05 月



## 摘 要

近代日本对中国等亚洲国家的侵略给这些国家的人民带来了巨大的灾难和痛苦的记忆，但日本对于战争性质的认识和在战争责任问题上呈现出右倾化的趋势，从而影响着东亚的稳定与和平。日本民族的“神国意识”即是日本的一种宗教理念，是指日本国土以及所有物都由神力所生并受众神保护的一种宗教理念。它经历了历代统治阶级的人为强化。特别是近代，统治阶级出于战争需要，对全体国民进行了国家主义、军国主义教育，使“神国意识”和天皇崇拜思想被强化成极力培养忠诚天皇即忠诚国家的意识的“皇国史观”。其内容包括日本中心论，民族优越论等等。其中的民族优越论等极端民族主义思想是日本对外发动侵略战争的深刻思想根源，在日本对外侵略扩张过程中起到了不可忽视的作用。

“大东亚共荣圈”就是在这种当时深入日本国民内心的“皇国史观”的指导下，日本政府制订出的对外侵略扩张的政策。本论研究的目的是：厘清“皇国史观”的历史源头及其内涵；明确“皇国史观”对日本近代对外侵略扩张的理论和思想上的指导作用；明确“大东亚共荣圈”政策对“皇国史观”的体现。最后通过“大东亚共荣圈”政策的惨败，揭示“皇国史观”的反动性。“皇国史观”是日本在近代化过程中推行对外侵略扩张政策的思想基础。对此进行分析和批判，有助于进一步揭示日本帝国主义的侵略本质。从“历史传统”和“思想认识”两个方面，历史地看待日本“皇国史观”的存在和发展的根源，能清楚地认识到“皇国史观”在发挥社会功能方面的特殊作用及其影响。本文采取文献分析法，从历史和思想层面分析日本制定对外扩张战略的动因及其反动性。

**关 键 词：**皇国史观，大东亚共荣圈，军国主义，民族优越论

**论文类型：**基础研究

## 要 旨

近代日本は中国などのアジア諸国への侵略がこれらの国々の人に大きな災難と苦痛の記憶をもたらした。一方、日本は戦争の性質の認識や戦争責任問題において右傾化の傾向を示し、東アジアの安定と平和に影響を与えている。近代日本の「神国意識」は統治者に人為的強化されていた。「神国意識」とは、日本の国土や所有物が神様によって生まれと保護されている宗教理念である。近代では、統治者は戦争の為に、全国民に対して国家主義と軍国主義教育を行い、「神国意識」や天皇崇拜思想を「皇国史観」に強化し、「皇国史観」とは、天皇に忠誠を尽くすという忠誠国家の意識を極力養う。その内容には日本中心論、民族優越論などが含まれていた。特に民族優越論などの極端な民族主義思想は日本の対外侵略戦争の深い思想の根源となり、日本の対外侵略拡張の過程において無視できない役割を果たしている。「大東亜共栄圏」とは、当時の日本国民の心に深く入り込んだ「皇国史観」の指導の下で、日本政府が対外侵略拡張政策のために制定したものである。本稿の目的は、まず、「皇国史観」の淵源と内実を整理することである。そして、「皇国史観」の日本近代対外侵略拡張に対する理論と思想上の指導作用を明らかにすることである。また、「大東亜共栄圏」政策の「皇国史観」に対する体现を討論することである。最後に、「大東亜共栄圏」政策の惨敗を通じ、「皇国史観」の反動性を明らかにすることである。「皇国史観」は日本が近代化の過程で対外侵略拡張政策を推進した思想基礎であり、これを分析と批判することを通じ、日本帝国主義の侵略の本質を明らかにするのに役立つ。次に「歴史伝統」と「思想認識」からすれば、日本の「皇国史観」の存在と発展の根源を歴史的に認識することができ、社会機能を発揮することに対し、「皇国史観」の特殊な役割とその影響を明確に認識することができる。本論文は「皇国史観」についての文献資料に対する分析と研究を行い、日本の対外拡張戦略策定の動因とその反動性を歴史と思想面から分析した。

**キーワード：**皇国史観、大東亜共栄圏、軍国主義、民族優越論

**論文類型：**基礎研究

## 目 録

はじめに .....	1
1 「皇国史観」の起源と確立 .....	7
1.1 日本「皇国史観」の思想遡源 .....	7
1.2 日本「皇国史観」の確立 .....	9
2 「皇国史観」の内容 .....	13
2.1 日本中心論 .....	13
2.2 民族優越性の理論 .....	16
2.3 日本の対外侵略と「大東亜共栄圏」政策 .....	19
3 「大東亜共栄圏」政策の施行 .....	27
3.1 皇国から宇内まで近代日本の拡張論調 .....	27
3.2 「皇民化」政策 .....	29
3.3 侵略の正当化されることのごまかし .....	31
4 「大東亜共栄圏」政策の崩壊及び「皇国史観」の反動性 .....	35
4.1 「大東亜共栄圏」政策の実質 .....	35
4.2 「大東亜共栄圏」崩壊の象徴 .....	36
4.3 「皇国史観」の反動性 .....	39
おわりに .....	43
参考文献 .....	45
致 謝 .....	49
攻读学位期间的研究成果 .....	51

## 皇国史観の日本侵略拡張戦略への影響

### —「大東亜共栄圏」政策を中心に—

#### はじめに

#### 問題提起

明治の日本は「脱亜入欧」<sup>①</sup>を宣言しつつ「アジア主義」<sup>②</sup>を掲げるという、屈折した文明論を装いながら、西洋と対等に対峙しようとした国家であった。それに対し戦後の日本は、戦後処理を行った上で、アジアと如何に一体化するかがキーワードとなったが、21世紀に入っても未だ戦前のアジア主義との決別がつけられていない。ある日本人はいつも過去の侵略戦争を否定し、侵略の歴史を美化し、右傾化の傾向を示し、それによって地域の平和と安定に悪影響を与え、中日関係も常にそれによって妨害され、中日関係さえ悪くなっている。では、日本はなぜこの侵略の歴史を認めない、根源はどこにある、日本は今の国際情勢のもとでどのような役割を果たし、中日関係をどのように処理したがつているのか。これらの問題は地域の安定だけでなく、両国人民が相互理解できるかどうかにも触れ、非常に重要な価値がある。上記の質問に答えるためには、まず歴史を鑑として、東アジア秩序に対する日本の歴史的思考を研究する必要がある。まず、一つの民族、一つの国家の歴史観は、国内外の政策の制定、国際関係の発展に重大な影響を与えている。

「明治以降の『文明開化』<sup>③</sup>、西洋化・近代化の流れの中において、『皇国史観』を国家装置の基礎にしている。」<sup>④</sup>本稿の目的は、「皇国史観」と「大東亜共栄

---

① 「脱亜入欧」という言葉は、欧米列強が植民地戦争を繰り広げていた明治時代に、『日本之輿論 一名・当世名士時事活論』（1887年（明治20年））の鈴木寿太郎など在外の日本人が造語し流布させた言葉である。明治時代（19世紀末）の日本において、「後進世界であるアジアを脱し、ヨーロッパ列強の一員となる」ことを目的としたスローガンや思想である。後には他のアジアの国の同様の動きについて使われることもある。

② アジア諸民族の連帯・団結によって、西洋列強のアジア侵略に対抗し、新しいアジアを築こうという思想と運動。アジア主義、汎（はん）アジア主義とほぼ同義に用いられ、〔1〕日本の大アジア主義の系譜、〔2〕孫文の大亜州主義、〔3〕ネルーの第三勢力論の三類型がある。日本の大アジア主義は、ともに西洋列強の圧迫下にあるアジア諸民族との連帯論とアジア大陸への膨張侵略論が交錯しながら展開した。

③ 「文明開化」という言葉は福澤諭吉が『文明論之概略』明治8年（1875年）の中で、civilizationの訳語として使ったのが始まりである。

④ 田村安興。皇国史観の表層と基底[J]. 社会科学, 2003(03), 31-72.

圈」政策は如何なる関係か、近代史におけるこれらの疑問に関して、必ずしも明確になっていない課題が多い。本稿は、その議論を明らかにする上で皇国史観の日本の対外拡張戦略への影響を明らかにすることが課題である。

## 先行研究

### 一、中国における先行研究

張衛娣は「日本“实力主义”对外战略理念评述」で「古来、日本は『実力主義』の對外戰略理念を遂行し、『実力』を尊び、『実力』によって自身を盟主とする『大東亜共栄圏』を構築しようとしてきた。『皇国史観』の核心は日本の天皇、国土、人種、宗教などを世界で最も『優れている』と言い、日本軍国主義による侵略戦争を『自存自衛』と『アジア解放』の『正義の行為』と言い、侵略戦争のために体を張ることを『天皇に忠誠を尽くす』『国のために寄付する』とした」<sup>①</sup>と指摘した。張衛娣は「浅析近代日本“尚力”对外战略理念的成因」で、「日本は『実力』が自分を中心とした世界秩序の構築する根本的な手段を主張し、近代日本の『尚武』の對外戰略理念の形成は偶然ではなく、内因もあれば、外因もあり、日本の政治、歴史、文化、当時の国際情勢など様々な要素に影響された結果である。そして、非理性的な『神道一皇国』観念と信仰は、日本の『尚武』の對外戰略理念を生み、政治家、思想家の思想に染まっている」<sup>②</sup>と書いた。于鵬は「试析日本右翼分子否定侵略，美化战争的原因」で「『皇国史観』は日本の支配者に民族綱領とされ、日本民族の特定の思想と観念を體現しているだけでなく、その民族のための闘う目標とその目標を叶うために採用された手段を定めた」<sup>③</sup>と指摘した。劉淑梅、李箭は「论日本近代的皇国史观」で「『皇国史観』は日本を中心に、『皇道』でアジアを解放し、『東亜新秩序』を構築すること指導し、すなわち皇国史観は日本を盟主とする『大東亜共栄圏』の構築を求める理論である」と指摘した。周新国、周隽は「日本“皇国史观”思想的演进与甲午战争」で「皇国史観は国体史観とも呼ばれ、日本近代天皇制国家イデオロギーの重要な體現であり、日本軍国主義動員の精

① 張衛娣. 日本“实力主义”对外战略理念评述 [J]. 日本研究, 2013.01.58-61.

② 張衛娣. 浅析近代日本“尚力”对外战略理念的成因 [J]. 南京政治学院学报, 2014.03.102-107.

③ 于鵬. 试析日本右翼分子否定侵略，美化战争的原因 [J]. 黑龙江教育学院学报, 2008(07).84-85.

神的な手段である」<sup>①</sup>と書いた。

臧运祜は「近代日本亚太政策的演变」で、「大陸政策」から「大東亜共栄圏」への変化過程をめぐって、近代日本の亜太政策の変化について考察を行い、変化の過程の中でいくつかの歴史的特徴を簡単にまとめ、日本の亜太政策、特に「共栄圏」構想の顛末を詳しく紹介している。「日本人は『九一八事変』から『太平洋戦争』までの間、明治時代に制定された亜太地域への侵略政策を全面的に実施し始めた」<sup>②</sup>と指摘した。呂万和、崔樹菊は「日本“大东亚共栄圏”迷梦的形成及其破灭」で「日本の『大東亜共栄圏』の範囲は1940年に画定された。『大東亜共栄圏』政策の構想は1916年にすでに雛型を備えていた、その政策の手順はまず『西進』、中国を侵略し、次に『南進』、東南アジア諸国を侵略し、再びオーストラリア、ニュージーランド、インドを占領した。そのため、特定の時期を除いて『北進』は日本の国策の主導とはならず、『西進』と『南進』に従属している。日本は東亜を独占しようとしている」<sup>③</sup>と指摘した。そして、呂、崔は日本の「大東亜共栄圏」政策の欺瞞性とその必然的な崩壊を分析し、「共栄圏」を侵略理論としてことを批判している。

## 二、日本における先行研究

多田真助は「平泉澄博士の歴史観と西欧思想：皇国史観への一視角」で「八紘一宇、大東亜共栄の理念、皇道実践という戦時中の標語の歴史哲学的基礎を定めたのが皇国史観であり、皇国史観も、満州事変から日中戦争、さらに大東亜戦争へと日本の興亡を賭した非常の時代を背景とし、経世の歴史学として、また国民精神の刷新と統合の歴史観である」<sup>④</sup>と指摘した。田村安興は「皇国史観の表層と基底」で「明治憲法は天皇がすべての国家権力の最終的な統括者、主権者としての地位を有したが、臣民に許されたものは、統治権を総攬する天皇のもとにおける若干の権利規定があるのみであった。明治憲法は幕末国学の世界観の流れに西洋から移入した立憲君主制を合体させつつ、日本固有の国体を宣言したものであった。それ故に、皇祖天照大神の子孫である天皇の名において、日本書紀の建国神話における『神

① 周新国．日本“皇国史観”思想的演进与甲午战争 [J].学术界, 2014(10):82-87.

② 臧运祜．近代日本亚太政策的演变[M].北京:北京大学出版社, 2009,26-29.

③ 呂万和．日本“大东亚共栄圏”迷梦的形成及其破灭 [J].世界历史, 1839(04), 32-47.

④ 多田真助．平泉澄博士の歴史観と西欧思想：皇国史観への一視角[J].キリスト教社会問題研究, 2010(01), 163-174.



勅』になぞらえた勅語によって憲法は発布された。今日に至るまで近代日本思想史の中に連鎖として流れている皇国思想、皇国史観を取り上げ、近世末期から明治初期に至るその連鎖をさぐる事にある。明治以降の文明開化、西洋化・近代化の流れの中において、皇国思想、皇国史観は国家装置の基礎とする」<sup>①</sup>と指摘した。斉藤浩一は「中野好夫『直言する』（1942～43）について」で「政治や社会への関心を深めつつ、国民の精神的統合に乗り出そうとする軍部の姿勢は、やがて1930年代の『満洲事変』から日中全面戦争期にいたるまでのいわゆる『非常時』の社会風潮によっても助長された。すなわち、当時の国内外における危機的状況を打開すべく、従来とは異なる方式に基づく『非常国策』の出現が期待されたのである。これに伴い、従来の『大正デモクラシー』的な社会を支えていた思潮が相対化される契機が生まれ、結果、欧米流の個人主義や自由主義、民主主義などの思想が積極的な批判の対象となった。そのうえで、これらの代替物として唱導されるようになったのが、日本の伝統的価値観を体現するものとされた『日本精神』や『皇道精神』であった。すなわち、そこでは、国家による強力な国民統制を伴う『挙国一致』や『尽忠報国』、『滅私奉公』の精神、あるいは天皇への絶対随順である」<sup>②</sup>と指摘した。

以上の分析により、現存している資料を見ると、国内学界では皇国史観に基づく日本の対外侵略政策研究は、些細であり、全面的な研究は形成されておらない。いくつかの論文は皇国史観思想と日本の対外侵略拡張政策との関係に対して全面的に分析しない、皇国史観という思想の社会性を分析するだけである。「大東亜共栄圏」に関する論文はその思想、理論から研究することは少なく、国内外の論著は戦争そのものと戦争過程における人物に関する論評に偏っていることが多いが、日本対外侵略思想の形成については、更に検討する必要がある。

① 田村安興．皇国史観の表層と基底[J].社会科学, 2003(03), 31-72.

② 斉藤浩一．中野好夫「直言する」（1942～43）について[J].東京海洋大学研究報告, 2018(02), 5-22.

### 三、研究方法

本稿は文献研究の方法を利用したものである。日本国立国会図書館国、CiNii などから必要な文献を閲覧し、学者の先行研究を踏まえ、皇国史観の研究の現状を整理し、そして先行研究の足りないところを探し出し、論題の研究の重複性を回避した。また、政策主導者たちの著作、講演及び新聞、文章を読み、ある問題に関する歴史状況を理解し、巨視的な視点を形成し、分析論証を行う。本稿で引用された日本学者の著作は、すべて国立国会図書館で閲覧することができる。

例えば、

年代	作者	書名
1339	北畠親房	『神皇正統記』
720	舎人親王	『日本書紀』
1669	山鹿素行	『中朝実録』
1823	佐藤信淵	『宇内混同秘策』
1982	永原慶二	『皇国史観』
712	太安万侶	『古事記』
1938	矢野仁一	『東洋史大綱』
1939	秋沢修二	『中国社会構成』
1996	古屋哲夫	『近代日本のアジアの認識』
1943	大川周明	『大東亜秩序建設』
1858	吉田松陰	『幽囚録』
1997	吉田孝	『日本の誕生』

北畠親房の『神皇正統記』、舎人親王の『日本書紀』、山鹿素行の『中朝実録』、佐藤信淵の『宇内混同秘策』などを閲覧した後で、皇国史観の形成過程を理解し、および皇国史観の影響をわかり、皇国史観についてのことを整理や分析し、本稿を作成した。

---

さて、本論文の構成を説明しておきたい。筆者は本稿で、皇国史観の日本の侵略拡張戦略への影響について探究する。その上、「大東亜共栄圏」政策を中心に分析する。本稿は主に四部分に分けられている。第一部分は、皇国史観の起源と確立について分析し、皇国史観の核心を究明する。第二部分は、主に皇国史観の内容について論述し、皇国史観と「大東亜共栄圏」政策の関係を討論する。第三部分は、主に「大東亜共栄圏」政策の施行を述べている。第四部分は、主に「大東亜共栄圏」政策の崩壊および皇国史観の反動性について論ずる。

## 1 皇国史観の起源と確立

「皇国史観」は「アジア太平洋戦争期にいわば国教化した天皇中心の超国家主義的日本史観である。その根源は幕末の尊攘思想、平田国学、明治の国粋主義などまでさかのぼりうるが、とくに昭和前期平泉澄らにより提唱されたものをさす。」<sup>①</sup>唯物史観歴史学の発展に対し危機意識を強めた平泉らは、『万世一系』の『国体』とそれを基軸として展開してきたとみる日本歴史の優越性を強調し、『大東亜共栄圏』思想に歴史的裏づけを与えようとした。その意味で皇国史観は非科学的であるのみならず、独善的な自国中心の歴史観で、天皇制と帝国主義を支えるイデオロギーであった。「皇国史観」は日本の天皇制の下で支配的なイデオロギーであり、その核心は日本の種族、天皇、宗教、文化などが世界で最も優れていることである。実は、「皇国史観」は、日本を盟主とする「大東亜共栄圏」の構築を支えるため理論である。この理論は日本軍国主義者の戦争熱狂を刺激し、その結果、中国、朝鮮などのアジア諸国に災難をもたらしただけでなく、日本国民を空前の大災害に見舞わせた。

### 1.1 日本皇国史観の思想遡源

日本の「皇国史観」思想は、西暦8世紀に漢字で書かれた日本古典『古事記』<sup>②</sup>（712年編修）、『日本書紀』<sup>③</sup>（720年編修）にすでに現れている。中世神道の五経典の一つ『倭姫命世紀』は「大日本は神国なり、天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝へ給ふ」<sup>④</sup>と宣言されている。このような「神国論」と、伝説の初代天皇「神武天皇」が考え出した「八紘一字」<sup>⑤</sup>理論は、日本永原慶二．皇国史観[M]．東京：岩波書店，1983，102-105.の対外拡張と侵略

<sup>①</sup> 永原慶二．皇国史観[M]．東京：岩波書店，1983，102-105.

<sup>②</sup> 『古事記』（こじき）は、一般に現存する日本最古の歴史書であるとされる。その序によれば、和銅5年（712年）に太安万侶が編纂した。

<sup>③</sup> 『日本書紀』とも呼ばれ、720年、舎人親王に勅修された日本の歴史書。いわゆる正史であって、神代から持統天皇までをその記述対象としています。通常、古い和風の訓読みがなされていますが、原文は純粋な正統的漢文であって、漢文として読む方が文意を取りやすい面があります。

<sup>④</sup> 神道五部書の一。1巻。神護景雲2年（768）禰宜五月麻呂の撰と伝えるが、建治・弘安（1275～1288）のころ、伊勢外宮の神官の渡会行忠の撰になったもの。天地開闢から、皇大神宮の各地御還幸、雄略天皇の代の外宮鎮座に至る詳細を記す。大神宮神祇本紀。

<sup>⑤</sup> 語源は日本書紀（神武紀の「八紘をおほひて宇（いへ）とせむ」）からである。

の思想を直に発展している。「八紘」とは四方四隅を意味し、元は中国の典籍『列子・湯問』、『淮南子・地形訓』から来ていたが、日本の古典『日本書紀』はこの言葉を用い、神武天皇の詔勅は、「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと」<sup>①</sup>と称し、世の中の八方を一字の下に置くことを意図していたが、この「一字」は、すなわち日本の天皇の統治である。『古事記』で「皇大御国は、掛けまくも可畏き神御祖天照大御神の、御生れ坐せる大御国にして、萬の国に勝れたる所由は、先づこいにいちじるし。国といふ国に、此の大御神の大御徳かふらぬ国あらめや」<sup>②</sup>と書いた。このような「神話」を「肇国の事実」とした、日本意識に込められた「万世一系」と「天壤無窮」の「国体意識」は、次第に「皇国史観」の形成を促していた。

「皇国史観」の形成については、江戸時代中期以降の儒学者や国学者の「国体論」や「尊皇論」にさかのぼっている。北畠親房(1293-1354)が著した『神皇正統記』<sup>③</sup>は神代から後村上天皇までの時期を扱う。著述の思想的原理は、度会神道を受け継ぎながら仏教や儒教をも取り入れて形成した親房独自の神道思想である。日本を神孫君臨と神明擁護が変わることなく実現する世界に例のない国とみなす神国論、神武天皇以来皇位が正しい理に従って継承し来った、そして現今では南朝こそが正統だとする皇位継承論・南朝正統論、政の担当者は神孫たる天皇家と藤原氏とに限定されるとする政体論、治政は正直・慈悲・智慧の三徳（ほとんど知・仁・勇の儒学的三徳と同一視される）を具現化したものでなければならぬとする政道論、臣民の君（天皇）への奉仕を最高の道徳とする道德論、歴史を皇祖神の意志や計らいの顕現とみる歴史論などが、神道思想を前提にして示される。近世・近代の思想界に大きな影響を与えた。北畠親房はまた、中国の陰陽、五行、五徳相生の理論を利用し、日本の「神国」の主体性と正統性を論証している。日本の「皇国史観」の思想起源である「神国論」や「八紘一字」の説は実際に日本の対外拡張の核心思想となっている。

①神武(じんむ)天皇が大和(やまと)橿原(かしはら)に都を定めたときの神勅に「六合(くのにのうち)を兼ねてもって都を開き、八紘(あめのした)をおおいて宇(いえ)と為(せ)んこと、またよからずや」(日本書紀)とある。

②『古事記伝』序章『直毘霊』に収められた本居宣長の詠んだ長歌。

③南北朝時代に南朝の柱石であった北畠親房(きたばたけちかふさ)の著。親房は本書の初稿本を1339年(延元4・暦応2)常陸(ひたち)国(茨城県)小田城にあって足利(あしかが)方の軍と対戦中に執筆し、43年(興国4・康永2)常陸国関城でこれを修訂した。

## 1.2 日本皇国史観の確立

江戸幕府初期、山鹿素行著した『中朝事実』は日本が天神の皇統がついに絶えることなく、また外国より侵されたこともなく、智・仁・勇の三徳において、外国、とくに中国よりもすぐれた国であることを、歴史に即して述べたものである。本書において、「日本は『中華』とよばれ、水土は万邦に卓爾として、人物は八紘に精秀」<sup>①</sup>なるゆえんが述べられ、日本主義的傾向は明らかである。

江戸幕府中期、本居宣長らは「神国」日本が世界を支配していることを宣伝し、日本の古書『古事記』に記述された「天照大神」を実際の帝王と見なし、「神道」を日本文化の原始的な精神とすることを称し、中華文化は日本への影響を一掃する為に「復古神道」を主張した。

江戸幕府後期、日本は西洋列強に侵略され、日本の思想家たちは様々な面から危機を救う方策を提案したが、その主流の意向は「神国論」の影響を受けた藩士たちの主張であり、その有名な人物は佐藤信淵、吉田松蔭、福沢諭吉らであった。

また、篤胤の影響を強く受けた佐藤信淵(1769-1850)は、『混同秘策』（文政6年=1823年）において、「皇大御国〔日本〕ハ大地ノ最初二成レル国ニシテ世界万国ノ根本」であるから、「全世界ヲ悉ク群県ト為スベク、万国ノ君長皆臣僕ト為スベシ」<sup>②</sup>として、世界征服のための詳細な計画を展開している。この思想は中国の対抗意識と欧米諸国のアジア進出に対する危機感を背景にしているわけであるが、これをさらに遡れば、「まことの道は、天地の間にわたりて、何れの国までも、同じくたダすちなり。然るに此道、ひとり皇国にのみ正しく伝はりて、外国にはみな、上古より既にその伝来を失へり」<sup>③</sup>、近代日本の「皇国史観」の確立をいたしと軍国主義侵略政策の先導となっている。

1867年、徳川慶喜は倒幕で「天皇」の返政を余儀なくされ、1868年に明治維新が始まり、同年、明治天皇は「宸翰」で「故に朕ここに百官諸侯と広く相誓ひ、列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問わず、親ら四方を経営し、

<sup>①</sup> 江戸時代初期の歴史書。3巻。山鹿素行著。寛文9（1669）年完成。『中朝実録』ともいう。皇統の系譜と事績を記して、その正統性と政治的権威を主張したものである。

<sup>②</sup> 佐藤信淵。宇内混同秘策[M]。東京：大同館書店。1937。32-33。

<sup>③</sup> 佐藤信淵。宇内混同秘策[M]。東京：大同館書店。1937。32-33。

汝億兆を安撫し、遂には万里の波涛を開拓し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す、汝億兆旧来の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事と為し、神州の危急を知らず。」<sup>①</sup>を發表し、「宸翰」の内容から見ると、天下の領土を治下しようとするのは、日本支配者長年の夢である。一方、東アジア大陸全体、ひいては全世界はその「遠大な目標」である。また、日本の明治政府は皇帝の「絶対権」を明確にし、「神道」を宣伝している。

1869 年に「修史に関する命令」を公布し、「八紘一字」の思想を提出した。1882 年に「軍人勅諭」が公布され、天皇に忠誠を唱える「武士道精神」が鼓吹され、1889 年に「大日本帝国憲法」が公布され「天皇神道の唯一無二」の地位が確立され、1890 年に「教育勅諭」が公布され、天皇に忠誠を尽くすことを核心とする軍国主義教育が行われた。

この時期、「神国論」や「脱亜論」<sup>②</sup>を唱えた重要人物として福沢諭吉がいる。「脱亜論」の中で、清国や朝鮮国が近代化を達成してアジアの隣国として共に発展していくことを辛抱強く日本が待っている時間は無い。日本は隣人として朝鮮国や清国を特別待遇しようとするのではなく、欧米諸国がやっていると同様の方法で清国や朝鮮国と関係を構築していくのがよい。日本が近代化を果たさないままの清国や朝鮮国と連携を強めることは欧米諸国に日本国そのものをも誤解させてしまうことにもつながりかねない。清国や朝鮮国の近代化を進めようとしない勢力とは交流をするつもりはないと私自身内心では思っている、といったことを意図していると思われる主張をしています。時事新報は福沢さんが主宰していた新聞だそうです。福沢諭吉は「文明開化」を力にして欧米を学び、中国、朝鮮などのアジア隣国を「野蛮」<sup>③</sup>の「悪友」と見なし、「脱亜入欧」を鼓吹した。1887 年に著した「外国との戦争は必ずしも凶事で

<sup>①</sup>1868 年 1 月 3 日、日本の明治天皇は「王政復古」の詔を公布し、正式に幕府の廃除を宣言し、新たな中央政府を設立した。「明治維新」の運動を開いた。同年 3 月 14 日、日本政府は天皇の名で「宸翰」（天皇御筆信）を發表し、「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと」と宣言した。

<sup>②</sup>西暦 1885 年（明治 18 年）署名なしで新聞「時事新報（じじしんぼう）」に掲載された、日本の外交姿勢に関する主張を述べている文章です。

<sup>③</sup>17・18 世紀の、野蛮人を「自然」の代表とする文明批判の例としては、フランソワ・フェヌロンの《テレマックの冒険》やモンテーニュ『エッセー』に出てくるアメリカインディアンについての記述がある。『エッセー』の第 1 巻第 31 章では、理性と芸術に対して自然が称賛され、「野蛮」という概念について考察を加えている。

はない」<sup>①</sup>が甲午戦争の予言となった。同年、日本参謀本部は「清国征討戦略」を策定し、日本の「大陸政策」<sup>②</sup>の端緒となり、第1歩は台湾攻略し、二番目は朝鮮併合し、三番目満蒙占領し、四番目は中国滅亡し、最後はアジア征服し、世界制覇となった、「八紘一宇」を実現することを提案した。日本の「皇国史観」指導下の軍国主義の「大陸政策」と世界制覇戦略の確立を示している。神話に現れたこのような日本国家と大和民族の特殊な観念は、日本人の心に潜在的な優越感を形成し、民族優越論の形成に基礎を定めている。

要するに、日本の政治家、思想家は、日本の神国理念と天皇の神権意識と偽りの世界征服の「使命感」を利用して、日本民族優越論を大々的に宣伝し、その優位性を利用して対外侵略拡張を鼓舞してきた。そのため、多くの日本人が民族の歴史の形成を正しく認識できず、日本の神国理念と天皇神権意識にだまされた。日本の近代歴史事実は、このような「皇国史観」を核心とする日本の思想が、後に「大東亜共栄圏」政策を推進する為に重要な理論根拠の一つを構成していることを証明している。

---

<sup>①</sup>『福沢諭吉朝鮮・中国・台湾論集』所収論説。

<sup>②</sup>大陸政策とは、日本は明治維新以降、国力が強くなり、中国や朝鮮などに拡張を行い、アジア制覇を企み、全世界を征服する総方針である。





## 2 皇国史観の内容

「皇国史観」は北畠親房の『神皇正統記』に始まる。北畠によれば、「三種の神器は『知恵の本源』である剣、『正直の本源』である鏡、『慈悲の本源』である玉であり、天皇の統治を象徴する三種は徹底した『徳治主義』を表している。」<sup>①</sup>たしかに、「皇国史観」は「抗日戦争」<sup>②</sup>のスローガンになった。

日本の危機に際して、全国民を鼓舞し団結させ、祖国を守るために死をも恐れぬ勇気の源になった。その史観が国民有事の支えになるだけのパワーになったことは間違いない。しかし、その史観が直ちにその思想の善悪や価値を評価することはできなく、その知性や暴力性を結論づけることはできない。そのため「皇国史観」の内容を討論することが必要である。

### 2.1 日本中心論

18 世紀初葉、軍国主義理論家と西洋化推進者の佐藤信淵が『宇内混同秘策』という文を發表し、いわゆる「宇内混同」とは、「世界統一」という意味である。では誰が世界を統一するのでしょうか。『宇内混同秘策』の冒頭に「皇大御国は大地の最初に成れる国にして世界万国の根本なり。故に能く根本を経緯するときは、則ち全世界悉く郡県と為すべく、万国の君長皆臣僕と為すべし」<sup>③</sup>と書いて、日本至上主義を唱えたのみならず、満州、朝鮮、台湾、フィリピンや南洋諸島の領有等を提唱したため、近代日本の対外膨張主義の先取り、さらには「大東亜共栄圏」構想の「父」とであるとみなす見解が存在する。

明治維新後、日本政府は「大陸政策」を極力推進し、中国の侵略を大幅に加速させた。日本の御用学者と理論家がでっち上げた「皇国史観」は、全力を尽くして侵略に奉仕し、中国侵略戦争のために旗が振られた。「日本中心論」と

<sup>①</sup> 『古事記』ではアマテラス（天照大御神）が天孫降臨の際に、ニニギ（邇邇芸命）に「八尺の勾璽（やさかのまがたま）、鏡、また草薙（くさなぎの）剣」を神代として授けたと記され、『日本書紀』には三種の神宝（神器）を授けた記事はなく、第一の一書に「天照大神、乃ち天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほのににぎのみこと）に、八尺瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙剣、三種（みくさ）の宝物（たから）を賜（たま）ふ」とある。

<sup>②</sup> 抗日戦争は 1941 年（昭和 16 年）12 月から 1945 年（昭和 20 年）8 月にかけて、大日本帝国と中華民国とイギリス・アメリカ合衆国・ソビエト社会主義共和国連邦などの連合国 との間で戦われた戦争である。太平洋戦争に対する当時の日本側による呼称である。

<sup>③</sup> 佐藤信淵。宇内混同秘策[M]。東京：大同館書店。1937。32-33。

は「皇国史観」の重要な内容の一つである。日本の御用学者は日本を中心とした観点で日本史、中国史、東洋史研究に従事し、多くの関連著作を執筆・発表し、日本が東洋史の核心であることを説いている。その代表的な人物は、東洋史の専門家矢野仁一、高岩、狄山謙蔵などである。日本が全面的な中国侵略戦争を発動した翌年、1938年に矢野仁一が『東洋史大綱』を出版した。それ中で「近代以来、西洋の政治勢力が東漸し、中国の政治文化分野に侵入し、中国の政治文化勢力が無力になった」<sup>①</sup>と書かれている。「しかし日本は西洋の政治文化勢力の侵攻により、強い刺激を受けて台頭し、中国に取って代わった。中国の政治文化勢力圏以外の南アジア、西アジア、東アジアなどの各民族にも刺激を与え、彼らの民族自覚を喚起し、東洋と西洋の対立意識を抱かせた。」<sup>②</sup>と述べた。これにより、「『我が国の東洋における地位はより重大である』という結論から、従来は中国を中心とした東洋史が、現在は我が国を中心とした段階に入り、従来の東洋史再検討の時期を迎えている。すなわち日本を中心とした大東亜史の体系を構築している。」<sup>③</sup>

高岩は1938年から1943年にかけて、『概説東洋史』と『大東亜現代史』の2部の史書を出版している。『概説東洋史』で強調されているのは、「従来の東洋史はいずれも中国を中心とした南と北の対立抗争の記録であったが、今後の東洋の運命は逆に、日本帝国の下で各民族が平和と幸福を楽しんでいるはずである。」<sup>④</sup>日本はすでに真の東洋の盟主であると考えられている。この盟主が支配すべき勢力範囲はどのくらいだか。『大東アジア現代史』では、「大東亜はアジア大陸のすべて、日本および南洋諸島を含み、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイなどの太平洋、インド洋の諸島も含まれる」と明確な回答をしている。実際、これも当時の日本軍国主義者の代表人物である東条英機らが言っていた「大東亜共栄圏」の勢力圏でもある。

狄山謙蔵の代表作は『大東亜交渉史論』で、「日本はアジアの太陽、アジアは世界の太陽」と書かれている。「だから、日本は世界の太陽だ、アジアには

①矢野仁一。東洋史大綱[M]。東京：目黒書房，1938。2-3。

②矢野仁一。東洋史大綱[M]。東京：目黒書房，1938。2-3。

③刘淑梅。论日本近代的皇国史观[J]。大连近代史研究，2007(00):41-52。

④高岩。大東亜現代史[M]。東京：開成館，1943。26-28。

日本の存在があるからこそ、生き生きとしている。生き生きとしたアジアが存在してこそ、世界には活力があると述べた。日本がなければ、アジアは死灰のようだ。だから、アジアの太陽という日本を中心に、アジアに新秩序を建設してこそ、世界新秩序建設をうまくいくことができる」<sup>①</sup>と述べていた。上述のように、日本はアジアの中心となったことを求めている。その「日本中心論」の正しさをさらに実証するために、もう一人の史家の秋沢修二氏は著書『中国社会構成』の中で、「私は中国社会の停滞性であるいわゆる「アジア式」の停滞性を発見した。しかし、このような中国式の停滞性は日本社会では見られない。日本社会と中国社会の性格は根本的に異なり、実際にはこの点に現れている。日本社会は中国社会よりも初めてにあり、はるかに後にあるが、輸入に努力し、中国文化を模倣し、鋭意追い抜き、ついに中国社会を超え、中国社会よりもはるかに強い大日本を形成した、これが日本社会の進歩性と先進性である。逆に、中国社会はバビロン、エジプトとともに世界文明古国の一つと呼ばれ、少なくとも漢代ではアジアの「ローマ」の地位にあったが、その特有の停滞性であるというアジアの停滞性のため、結果として欧米帝国主義の従属国、欧米資本の半植民地となった。だから、中国社会の最大の不幸というべきは、中国社会を欧米に属するという特有の停滞性に導くことである。少なくとも、中国社会の停滞性格は、欧米列強が中国を半植民地化するために可能な根本的な条件を提供している」<sup>②</sup>と指摘した。しかし、幸いなことに、「今回の『支那事変』<sup>③</sup>の結果は中国社会に希望をもたらした。つまり、皇軍の武力は、中国社会の『亜細亜式』停滞性の政治的支柱である軍閥を支配し、中国の主要地域から清掃していった。強くて自立した日本との結合により、中国社会特有の停滞性を克服し、真の自立の道である『大東亜共栄圏』の道を開いた』と述べた。日本はもちろんこの「共栄圏」の中心である。

<sup>①</sup>高岩. 大東亜現代史[M]. 東京：開成館，1943. 26-28.

<sup>②</sup>秋沢修二. 中国社会構成[M]. 東京：白楊社，1939, 4-5.

<sup>③</sup>1937(昭和 12)年 7 月 7 日に惹起した盧溝橋事件を受けて、政府は 11 日「北支事変」と呼称することとしたが、戦線は上海にも広がり、従来の不拡大方針も放棄されたため、9 月 2 日「支那事変」と改称することが決定された。当時、「日支事変」といった案も出された。ちなみに、「支那事変」という呼称は、例えば参謀本部編『昭和三年支那事変出兵史』(1930 年)のように、山東出兵の際など、それ以前からも日中間の紛争の呼称として使用された。

## 2.2 民族優越性の理論

「皇国史観」の核心思想の一つは、日本は神が守る国であり、大和民族は神によって選定された民族であり、世界で最も優れた民族であることである。この民族の優越性理論は近代日本が対外侵略の極めて重要な思想源流である。

日本人は自分の国や民族に対して、日本は神国であると日本人は神様の子孫であると考えた、という見方は8世紀の2冊の本『古事記』と『日本書紀』に由来しており、『古事記』の上巻は天地初発ときの造化三神、神世七代、天照大神、出雲の国譲り、天孫降臨、日向三代などの物語を載せ、天地・万物の生成、天皇支配の起源と正当性などを説明する。神話では日本人の祖先は八百万神の中で最高の神である天照大神である。天皇は万世一系の皇国を継承した「現人神」であり、神の命令を受けている。神の命令だから、日本の国土も万物も、もちろん最高で、最も優れている。日本民族は神の子孫であり、最も優れた民族であり、日本の「国体」は「万邦無比」<sup>①</sup>の神国であると考えられている。『日本書紀』では、初代天皇即位の時に勅都令で「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと」<sup>②</sup>と提唱されていた。「八紘一字」は世界を統一して一家を天皇の支配下に置き、これを日本の肇国精神と目標とし、世代を踏襲し、奮闘することを示している。

幕末、日本民族危機の衝撃を受けて、日本のナショナリズムは高まった。幕末の思想家は古代神国思想を継承と発展させ、尊王論と国体論を力話し、山鹿素行は1675年著の自伝的著作『配所残筆』では、「本朝は天照大神の御苗裔として、迄其正統一代も違候事無之藤原氏補佐の臣迄世々不断して、摂録の臣相続候事、乱臣賊子の不義不道成事無之候故なり、是仁義の正徳甚厚成故にあらずや、次に神代より人皇十七代迄は悉聖徳太子の人君相続あり、賢聖の臣補佐奉り、天地の道を立、朝廷の政事國郡の制を定め、四民の作法日用衣食家宅冠婚喪祭の禮に至まで各其中庸を得て、民やすく國平に、萬代の規模たつ」

<sup>①</sup>北畠親房は、我が皇統の万邦無比なることを道破して、大日本は神国なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝へ給ふ。我国のみ此の事あり。異朝には其のたぐひなし。此の故に神国と云ふなり。

<sup>②</sup>語源は『日本書紀』（神武紀の「八紘をおほひて宇(いへ)とせむ」）からである。

①と述べている。「そのため、四海は広く国は多いが、本朝に匹敵する国土は無い。そして歴史的に見ると、日本は外国人、に占領されたり支配されたりしたことがなく、日本が『中華』であることを証明するのに十分である。」②天皇の地位を強化することで強力な民族主義国家を築きたいと考え、一時「尊王攘夷」③が全民族のスローガンとなった。当時の場合では、日本のナショナリズムが植民地勢力に反対して民族独立を維持するのは主流であったが、一方で、対外侵略拡張のものはっきりと暴露されており、民族優越論はこのような対外拡張理論の原点である。

明治維新以来、日本は近代「天皇制」④を確立し、憲法は「日本帝国は万世一系の天皇之を統治す、『国体』の基礎を『民族の確信』と『天孫降臨の神話』に求めることにより、『国体』を超実定法的存在とし、かつ、永久不変のものとする。日本は『神国』であり、天皇は世界を統治す」⑤と規定している。明治政権の「神権」の性格を体现している。これは日本が民族優越感によって発展した侵略思想は政治的保障を提供した、日本の近代化の成功は、その侵略思想の極度な膨張に物質的な支えを提供した。「藩閥勢力は明治初年から自分が将来的に欧米式の近代化を実現する可能性があると考え、清朝に優越感を抱いていたが、朝鮮はその視野の外で、朝鮮を自分よりはるかに下位国としていた。」⑥

日本は明治維新後約 30 年の間、国内で「富国強兵」⑦のコースを推進してきた。世界資本主義の範囲では、日本は非西洋国家として急速に西洋科学技術

①山鹿素行、配所残筆、1 巻、1675、323。

②赵恒来、日本対韓侵略政策史研究[M]、汉城：玄音社、1996、15-16。

③尊皇攘夷（そののうじょうい）とは、君主を尊び、外敵を斥けようとする思想である。江戸時代末期（幕末）の水戸学や国学に影響を受け、維新时期に昂揚した政治スローガンを指している。

④もともとの天皇制という用語は、明治維新以降の近代国家の君主制機構とそれを正当化するイデオロギーを示す語として生まれた。明治維新によって成立した国家権力は、その政治支配の正統性根拠を、『古事記』・『日本書紀』の神話に由来する「万世一系」の天皇の統治に求め、それが日本の「国体」、すなわち変わらない国柄であるとした。そして天皇に統治権のすべてが帰属する政治体制をとりつつ、その下で文武の官僚機構が強大な力を発揮する専制的体制を採用した。

⑤大日本帝国憲法（だいにほんていこくけんぽう、だいにっぽんていこくけんぽう、旧字体：大日本帝國憲法）は、1889 年（明治 22 年）2 月 11 日に公布、1890 年（明治 23 年）11 月 29 日に施行された日本の憲法。

⑥古屋哲夫、近代日本のアジアの認識[M]、東京：緑蔭書店、1996:108-109。

⑦富国強兵（ふこくきょうへい）とは、主に明治時代に日本が掲げた国家的スローガンであり、経済を発展させて軍事力の増強を図る政策をいう。その考え方の歴史は古く、春秋戦国時代の中国の古典に由来する。

を掌握して近代化を実現した国である。経済的には、「奇跡的に帝国主義の高度発展時代に産業革命を経験した唯一の非西洋国家となった。」<sup>①</sup>19 世紀 80 年代まで、日本は資本主義経済の発展を大きく前進しており、工業生産が欧米資本主義国にはるかに遅れている現象が変わり始めている。1885 年以降、日本工業は飛躍的に発展し、日本は 1890 年前後に工業国になり始めた。農業と国際貿易の面でも著しい発展を遂げた。1894 年に日本が「甲午中日戦争」<sup>②</sup>を発動した頃になると、日本の資本主義の発展は、すでに大陸に拡張する物質的基礎を備えていた。資本主義上昇期にあった日本は、生活様式、芸術、法律制度などの面で西洋文明の成果を取り入れている。1885 年に内閣制が成立し、1889 年に大日本帝国憲法が公布され、一部の日本人は、近代政治民主化の重要な象徴として 1890 年に国会が開設された後で、日本の政治面の欧化の程度はまだ保守的だが、アジアでは最先端であり、そのため、日本はアジアでは特殊な「例外」であり、アジアの他の国の民族を指導する使命を持つことだと考えていた。

日本民族優越論が盛んになるにつれて、1874 年に中国台湾に出兵し、日本はアジアの代表とした清朝政府と交渉した。1875 年に朝鮮を侵犯し、翌年に朝鮮を占領し、日本の民族優越意識を朝鮮に強く加え、朝鮮の近代への歴史過程を遮断した。1894 年に文明国と自負した日本は、朝鮮の内政改革の旗を掲げ、アジア隣国の固有の伝統文化を顧みず、朝鮮の内政改革案を指定し、「中日甲午戦争」を発動した。1904 年に中国東北でロシアと東北の覇権を争う帝国主義戦争が発動され、日本は自己の利益のために、中国がロシア人から「満州」を奪還するのを助けた。これらすべては、日本が先に中国台湾を征服し、後に朝鮮を征服し、中国東北と内モンゴルを征服し、さらに中国大陸部を征服して東南亜と世界を征服する「大陸政策」とつながっている。日本民族自身の独特な文化伝統と民族信仰は、歴代の支配階級と思想家の大々的な宣伝を通し、社会の各階層に強制的に注入・浸透させ、日本に神聖な使命をを持たせること

<sup>①</sup>保羅・肯尼迪著. 大国的兴衰 [M]. 蒋葆英译. 北京: 中国经济出版社, 1989.261.

<sup>②</sup>日清戦争（いっしんせんそう）は、1894 年（明治 27 年）7 月 25 日から 1895 年（明治 28 年）4 月 17 日にかけて日本と清国の間で行われた戦争である。なお、正式に宣戦布告されたのは 1894 年 8 月 1 日であり、完全な終戦は台湾の平定を終えた 1895 年 11 月 30 日とする見方もある。

に加え、近代明治維新以降学んだ西洋技術が日本に深刻な影響を与えた。民族の優越性の理論は日本の対外政策において重要な地位を占めており、日本の侵略戦争を起こした理由の一つである。

### 2.3 日本の対外侵略と「大東亜共栄圏」政策

「徳川幕府が始まって、日本の長期の鎖国は、経済が疲弊し、吏治が腐敗し、武備が弛緩し、封建体制の危機を示したなど、様々な社会的弊害が生じた。また、まずロシア南下による日本への脅威があり、その後も米英の不平等条約の束縛があり、幕末の思想家にも危機意識を抱かせた。彼らは戦略的な目で世界と日本を見つめ、日本と西洋列強の関係と力の対比を認識することができる。」<sup>①</sup>明らかに、一度攘夷を唱えた日本は、西洋の強さを意識し、「アヘン戦争」<sup>②</sup>を通し、日本は清朝の腐敗と衰弱を見た。日本と西洋、中国の力の対比では、中弱西強が極めて顕著になっている。日本にはしばらく、英米が課した不平等条約を廃止し、損失を挽回する力がない。既成の不平等条約を認めた後、西側の侵略を受けた損失を補償し、戦略力を増強するために、近隣と弱国に拡張し始めた。日本はもともと根深い「大日本主義」に加え、豊臣秀吉以来大国になることを夢見、島国の限界を突破してきた。この突破の意欲は必然的に隣国を侵略することである。これが日本近代史を貫いた戦略拡張主義を形成する。

#### 一、三木清の「大東亜共栄圏」理論

三木清は、中国を初めとするアジア諸国への日本の軍事的侵略をその「必然性」と「普遍性」において位置づけるのかということと主張した。

西洋帝国主義からアジアを開放し、日本がアジア、この時点では日本と中国、に「東亜共同体」という自立的な圏域を立ち上げることで、旧来のヨーロッパ的世界秩序を解体し、東亜共同体を含む、新たな「世界史の統一的な理念」に基づいて世界全体を再秩序化するという構想である。三木は 1942 年、大東亜戦争の始まりを受けて、「東亜秩序建設のための戦争は道義戦争である。戦時

<sup>①</sup>刘淑梅. 论日本近代的皇国史观[J]. 大连近代史研究, 2007(00).41-52.

<sup>②</sup>1840~1842 年、イギリスと中国（清）との間に行われた戦争。中国の半植民地化の起点となった。



認識の根底には道徳的意志がなければならぬ」<sup>①</sup>と述べている。モラルへの意志の存在が戦争を正当化する大きな分岐点であるという認識は、三木に一貫している認識である。

例えば 1938 年に書かれた「東亜思想の根拠」<sup>②</sup>によれば、日本が中国に軍事的に介入せねばならぬは、侵略的意図のためではなく、中国の近代化の遅れが招いた「白人帝国主義の駆逐」<sup>③</sup>のためである。未だに中国は、民族主義の中にあるが、それは「支那の独立要求」に発している。しかしながらそれを妨げているのが列国の帝国主義である。支那の独立は達成されねばならない。しかし中国の独立で問題が片づくわけではない。というのも、「世界史の現在の階段がもはや単なる民族主義の時代ではない」からであり、我々は「東亜共同体の思想の世界史的意義を闡明することから出立」<sup>④</sup>みせねばならぬからである。こうして支那の独立はもはや、支那単独の問題ではなく、東亜共同体の案件に移されてしまうのである。ここで連関づけられているのは、西洋帝国主義、近代化に遅れたために植民地化されつつある支那、支那の分裂を阻止するために支那に軍事介入「せざるを得なかった」日本という三者であり、これらが日本を盟主とする「東亜共栄圏」の必然性を正当化するのである。

帝国主義的西洋に変わって日本がアジアを支配するというのではない。東洋の統一とは「世界史についてのいわゆるヨーロッパ主義、世界を白人的見地からのみ考える思想を打破して真の世界の統一を実現すべき意義を有している。」<sup>⑤</sup>「支那の独立を日本は阻止すべきではないし、日本は支那を征服するわけではない以上、近代国家への発展や、民族主義を否定してはならない。」

<sup>⑥</sup>三木はここで、日本が行使しうる権利は、基本的に支那にも同様に認められ

①三木清「戦時認識の基調」15巻、460.

②三木清「東亜思想の根拠」15巻、308-325.

③三木清「東亜思想の根拠」15巻、131.

④同上、312.

⑤同上、313.

⑥同上、311-312.

るべきであるという議論をしている。これは普遍的な原理なので、西洋人も有効である。「白人帝国主義の駆逐」と言うも「駆逐さるべきものは帝国主義であって白人ではない。」<sup>①</sup>このようにして、東洋の統一の実現は、「真の世界の統一の基礎」となるのである。三木の議論において特徴的なのはこのような相互的に対等な関係であり、反人種主義である。このような理念にたつ「大東亜共栄圏」は、理論としてはきわめて非の打ち所のないものにも見える。

## 二、大川周明の「大東亜共栄圏」理論

1937 年、日本が全面的に中国侵略戦争を発動した後、日本の一部の御用学者は日本の軍事侵略に合わせて、「大東亜新秩序」<sup>②</sup>、「大東亜共栄圏」<sup>③</sup>、「共存共栄」<sup>④</sup>などの中国侵略理論を提出した。例えば『東亜協力体理論』、『大東亜建設の指導原理』、『大東亜皇化圏論』、『大東亜共栄圏建設の構想』、『大東アジア建設の基本理念』や『大東アジア秩序建設』など、日本を中心に大東亜共栄圏建設に関する理論・専門書が次々と出てきている。その中で最も欺瞞的で影響が最も大きく、最悪なのは大川周明の『大東亜秩序建設』である。

大川周明は日本ファシズム理論家であり、大亜細亜主義と中国侵略を鼓吹する一連の論著を執筆・発表した。『大東亜秩序建設』がその代表作である。この本で、大川周明は三つ虚言をでっち上げた。第一に、日本が中国の主権を占め、朝鮮を合併したのは、日本が先覚者の姿勢で中朝両国を支援して革新を進歩させ、大東亜新秩序を建設するための準備である。大川周明は明治維新以来、日本が中国を併合した琉球、台湾を占領し、「満州」を領有した中国と朝鮮を侵略した歴史を振り返った際、なんと「日本のすべての発展は決して単純な領土野心の追求ではない」と宣言した。私たちが最も記憶すべきことの一つは、このすべてが「東亜新秩序」の確立に準備されていることだ。繰り返し強調しているように、近代日本の先覚者は、日本国内の政治の革新をするだけでなく、

<sup>①</sup>同上. 369-370.

<sup>②</sup>1938 年に第一次近衛文麿内閣が発表した声明（近衛声明）で表明された対アジア政策構想である。

<sup>③</sup>中国や東南アジア諸国を欧米帝国主義国の支配から解放し、日本を盟主に共存共栄の広域経済圏をつくりあげるという主張。

<sup>④</sup>二つ以上のものが対立することなく互いに助け合い、共に栄えること。「共存」は二つ以上のものが対立せずに存在することである。

近隣諸国の改革も実現すると確信している。この両者を組み合わせて復興アジアを建設しなければ、明治維新の理想は完全には実現できない。

第二に、歴史上のすべての戦争は、欧米列強の東亜への侵略に反撃するためであり、東亜各国の利益を守るためである。大川周明によると、1894 年の中日甲午戦争は、日本が欧米列強に対して東アジアを侵略した最初の反撃である。著書には「今回の戦争はなぜ戦ったのか。表面的には日中両国の戦争であるが、本質的には、日本の西洋による東アジア侵略に対する最初の反撃であり、中国という帝国侵略主義の傀儡に対する日本の武力抗議である」<sup>①</sup>と述べた。さらに理由をでっち上げて、「この時の日中両国は、欧米の中国侵略に対して、互いに共通の戦線を結んでいるのか、互いに敵視しているのかという関係にある。両者のうちの一つに違いない、しかし中国の政治家は愚かにも後者を選んだ。彼らは自宅しか知らず、国を知らず、まして東アジアの興廃などの意識が完全に欠けており、彼らは朝鮮を守るのではなく、朝鮮を売り、朝鮮に対して自分の宗主権を主張している。北朝鮮政府の考えも問わず、北朝鮮の沿岸地帯をロシアに割譲して海軍本拠地とし、英国による朝鮮の巨文島の占領を認め、日清戦争が誘発された。中国を傀儡とした朝鮮への侵略は、日本国家の安否に脅威となり、日本は反撃するしかない」<sup>②</sup>と指摘した。

彼の結論は、「清朝末期の政治家が欧米列強の賄賂を受け取り、自国の領土と権益を彼らに売却し、彼らの勢力範囲を東アジアの土地に拡大させたことは、政治的罪悪である」<sup>③</sup>と結論した。アジアの救世主であることを自認する日本は、欧米列強の侵略勢力を東アジアから駆逐する一方で、中国を救うために甲午戦争を発動した。

大川周明は 1904 年の日露戦争を欧米列強によるアジア侵略への二回目反撃と再定義した。

著書には「日露戦争は日本が帝国主義による東アジア侵略への 2 回目の反撃である。同時に、ロシアと戦ってそれを破ったことは、アジア諸国の覚醒を促す」と述べた。「さらに重要なのは日露戦争での日本の勝利により、世界の

<sup>①</sup>大川周明. 大東亜秩序建設[M]. 東京: 第一書房, 1943. 26.

<sup>②</sup>同上.

<sup>③</sup>同上. 27.

史が新たなページを開き始めたことだ。日本のロシアへの勝利は、異人種に最初の打撃を受けたのも最も深刻な打撃を受けた。このことは諸国に勇気と希望を与え、列強の残虐な支配下でも諸民族に理想と活力を注入した」<sup>①</sup>と強調した。

周知のように、日露戦争とは日本とロシア両国が中国東北勢力圏を争う帝国主義侵略戦争である。戦争の結果、日本はロシアに代わって「南満」を占拠し、その後徐々に「北満」を蚕食し、さらに「九一八事変」を発動し、中国東北を植民地にし、東北におけるロシアの侵略勢力を完全に消滅させた。中国人民にもたらしたのは残酷な民族圧迫であり、虐殺であり、略奪であり、ファシスト支配であり、「列強の残虐な支配下でもがく諸民族に理想と活力を注入した」とは全くの虚言である。第三に、全面的な太平洋戦争を行うことは、大東アジア新秩序の実現のためである。

大川周明は、「大東亜戦争の当面の目的は、英米などの敵対勢力を大東アジア地域から掃討することである。次は大東亜秩序の建設であり、そのためには「支那事変」の処理、すなわち支那との一致協力という絶対条件を備えなければならない」<sup>②</sup>と述べた。「共存共栄」とは、「戦争で中国を征服し、「日本の国家統一と中国の革新」を実現し、さらに両者を緊密に結合させてアジア復興を実現したのは、両国共通の宿命的な課題である。」<sup>③</sup>

上記の大川周明の発言は、全面的な太平洋戦争を通じて中国を征服し、中国を日本に従属させる一方で、英米を打ち負かしてその侵略勢力をアジアから追放し、日本は中国を独占し、アジアを制覇し、日本を中心とした「大東亜共栄圏」を構築することを強調している。

### 三、「大東亜共栄圏」政策でアジア侵略の行為をごまかすこと

日本が英米に対して行った戦争は、アジアが英米に侵略された国と民族を解放するためのである。その代表的な著作は高橋勇の『亜細亜侵略史』であり、その本の序文には、「大日本は神国であり。…神武天皇肇国の精神は、日本の心の中で更生し始めた。何にも亜細亜民族の団結とか統一とか、そんなケチ臭

<sup>①</sup>大川周明、大東亜秩序建設[M].東京：第一書房，1943. 26.

<sup>②</sup>同上.

<sup>③</sup>同上.

ひ考えのものではない。人類主義の表徴の積りでこの題を選定したわけだ。人類の幸福は、各人の幸福の拡張だ。世界平和の必要なるが為には、どうしても吾々としては腐敗した亜細亜自身が、欧米人に遜色のない人格者にならなければならない。現状から考へると、どうしても第一歩として亜細亜人は覚醒を要する、どうして魚食魚たらん根性から脱れねばならぬ」<sup>①</sup>と書いた。日本の軍国主義歴史家は様々な史学バージョンを通じて、英米など欧米列強のアジア、特に中国への侵略を厭わず強調している。日本はもともと悪魔が無理に自分を救世主に着飾って、救世主の名で別の悪魔とアジアを争い、列強が東アジアに分割した局面を日本が独占しようとしているのが、これらの日本史家が東洋史を書く本当の目的である。

#### 四、「大東亜共栄圏」政策とは

「大東亜共栄圏」政策とは、第二次世界大戦中に日本で唱えられたアジア政策の理念である。中国や東南アジアを欧米列強の植民地政策から解放し、日本が中心となって独自の経済圏を打ち立てるという内容である。しかし、実際にはこの理念は日本のアジア侵略を正当化するために出てきたものであり、欧米列強は 1930 年代に起こった世界的な大不況を乗り越えるために、植民地支配を拡大していき、大東亜共栄圏の発想も実質的にはこれと同様のものである。大東亜共栄圏の理念には、欧米列強に植民地支配されていた民族を解放し、自主自立を促すことが含まれていたため、初めのうちはこの理念を歓迎する国々もある。1939 年 9 月に第二次世界大戦が全面的に勃発し、日本帝国主義は英米の欧州戦場での不利な状況を利用して、南進が英、仏、荷などの東南アジアの植民地を奪取しようと画策した。1940 年 8 月 1 日、近衛内閣は「基本国策要綱」<sup>②</sup>を投げ、日本は「皇国を核心とし、日華満の強固な結合に基づく『大東亜新秩序』を構築し、大東亜全体を含む皇国自給自足経済政策を確立すると宣言し、正式に日本の侵略目標を『大東亜共栄』と呼んだ。」<sup>③</sup>。東条英機の表現によれば、「大東亜共栄圏」建設の根本方針は、「帝国を核心とする道義

<sup>①</sup>高橋勇、亜細亜侵略史 [M]。東京：岩波書店，312。

<sup>②</sup>1940 年（昭和 15）7 月 26 日、成立直後の第二次近衛文麿（このえふみまろ）内閣の閣議で決定した基本国策の方針。大東亜新秩序の建設と、国防国家体制の確立を基本方針とし、新国民組織の確立や議会制度、行政制度の改革をも掲げていた。

<sup>③</sup>復旦大学歴史系日本史組編訳：『日本帝国主義対外侵略史料選編：（1931—1945）』，417。

に基づく共存共栄の秩序を確立」しようとすることにあった。しかし実際は、東アジアにおける日本の軍事的、政治的、経済的支配の正当化を試みたものにほかならなかったといえる。第1次近衛内閣当時の「東亜新秩序」<sup>①</sup>は日本、満州、中国を含むものにすぎなかったが、「南進論」<sup>②</sup>が強まるにつれて、インド、オセアニアにいたる大東亜共栄圏構想に拡大された。大東亜省の設置と「大東亜会議」<sup>③</sup>の開催は、このような方針の具体化にほかならない。

「大東亜共栄圏」の構想は、日本帝国主義が世界を制覇する植民地拡張野心の暴露である。日本が「大東亜戦争」を発動し、英米制覇に反対し、英・米の旧秩序を打破し、「大東亜共栄圏」を建設するとの意味何度も宣伝したのは侵略であり、日本のアジア支配を正当化しようとしたものである。「東洋人のアジア」とは、アジア諸国を日本の植民地支配下に置き、最終的に皇国史観統治下の「八紘一宇」の目標を実現することである。

---

<sup>①</sup>1938年11月3日「東亜新秩序」声明が近衛内閣によって発せられる。声明は、声明本文及び同日のラジオ放送からも明らかなように、大きく二つの柱から成っている。第一に、国際正義に立脚する「新平和機構」である。近衛は、満州事変を積極的に肯定はしたものの、特に1934年の訪米以来、対米関係のジレンマに苦悩しており、それを解決するとともに、日中戦争によって悪化した国際社会との関係を、「国際正義」に基づいた「新平和機構」を通して修復するために生み出されたのである。第二に、「日満支三国による「真に道義的基礎に立つ自主連帯の新組織の建設」である。これまでアジア主義に基づく連帯の表明は公的には控えられていたが、日本外交史上初めて公式に声明が出されたのである。

<sup>②</sup>第2次世界大戦前の日本近代史における外交政策についての議論。日本が東南アジアなど南方に経済的、政治的、武力的進出を行うべきだという論で朝鮮、満州方面に発展しようとする北進論と対立した。

<sup>③</sup>1943年11月5日から6日まで東京で開催された首脳会議。大日本帝国をはじめ、「大東亜共栄圏」の7つ加盟国の代表が出席した。今回の会議は日本が主催した。



### 3 「大東亜共栄圏」政策の施行

#### 3.1 皇国から宇内まで近代日本の拡張論調

近代日本の拡張主義のイデオロギーは、日本帝国主義の対外侵略行為の背後に隠され、そのために思想根拠と理論的支えを提供する戦争ツールである。それは近代に軍国主義者のために口実を作り、アジアの人々に忘れられない苦痛と災難をもたらした。しかし長い間、ある日本人は公然とそれをかばって、対外拡張を一種の「グローバル化傾向」に美化したり、植民地社会の近代化を加速させる役割を客観的に発揮していることを強調したりしてきた。近年日本社会で高まりつつある「日本優越論」「大東亜戦争解放論」は、さらにこのイデオロギーが復活する傾向を示している。

周知のように、近代日本の対外拡張は往々にスローガンを掲げている。自国の生存と発展のために、「海外雄飛と八紘一宇」を追求し、いわゆる「正当な行動」であることを鼓吹する。これは「アジア解放」であり、アジアの人々を欧米列強の束縛から脱却させるために天に与えられた「偉大な使命」である広く宣伝している。両者は本質的には日本帝国主義の対外侵略の野心を満たすためであり、拡張行動に奉仕する戦争ツールであるが、その使用する理論構造と掲げられた旗から見ると、両者は区別されている。「近代日本の拡張主義イデオロギーには、少なくとも2つのタイプがある。第一に『国家本位を鼓吹する拡張主義』であり、『国家階層』に着目し、その対外拡張の目的は日本の『国益』を図っている。第二に、『地域本位と称した拡張主義』であり、『地域階層』に着目し、対外拡張の目的はアジアの地域利益を守ることである。」<sup>①</sup>この2つのタイプを具体的に分析すると、「国家階層」に着目した「国家本位を鼓吹する拡張主義」は非常に極端で特殊な性質を持っていることが分かる。日本の著名な学者である丸山真男(1914—1996)が述べたように、近代欧米帝国主義の対外拡張のイデオロギーとは異なり、東洋社会、アジア社会の要素を持つ

<sup>①</sup>林庆元、杨齐福、大东亚共栄圏の源流 [M].北京：社会科学文献出版社，2006.216.



一方で、他のアジア諸国とは相容れない、何らかの複雑さを示している。この複雑さこそが、近代日本の「国家本位を鼓吹する拡張主義」が変わった特質を持っていることを意味しているのかもしれない。欧米列強とともに対外武力拡張を図るだけでなく、他国を排斥・圧迫する内在的衝動がさらに激しく、表現形態がより露骨になり、最終的には極端な形に向かってファシズムと合流する。同時に、欧米に反感、抵抗の心理があり、帝国主義の競争の観点に立っても、アジアで欧米と対峙する角度に立っても、ある程度の抵抗性を示していますその結果、この「アジア指向拡張性」と「欧米指向対抗性」は歴史的変位の過程で発展・

融合し、最終的には「国家本位の拡張主義」を「欧米に対抗したアジアへの拡張主義」として、「欧米列強に代わって独自にアジアを制覇する」侵略の道へと向かうことが避けられなかった。

この2つのタイプをさらに考察すると、「アジアへの拡張性」は近代日本拡張主義イデオロギーの最も主要な特徴の1つであることが分かる。日本社会は近代以前から、「世界万国より優れた神国思想」と「日本式華夷秩序観」によってアジアの他の国を侵略する考えが芽生えてきていた。例えば、吉田松陰は1854年の『幽囚録』に、「太陽は昇っているのでなければ西に傾いているのであり、月は満ちているのでなければ欠けつつあるのである。同様に国も隆盛でなければ衰えているのだ。だから、よく国を保持するというのは、ただたんにそのもてるところのものを失わないというのみではなく、その欠けるところを増すことなのである。いま急いで軍備を固め、軍艦や大砲をほぼ備えたならば、蝦夷の地を開墾して諸大名を封じ、隙に乗じてはカムチャッカ、オホーツクを奪い取り、琉球をも論して内地の諸侯同様に参勤させ、会同させなければならない。また、朝鮮をうながして昔同様貢納させ、北は満州の地を割き取り、南は台湾・ルソンの諸島をわが手に収め、漸次進取の勢いを示すべきである。しかる後に、民を愛し士を養い、辺境の守りを十分固めれば、よく国を保持するといいうるのである。そうでなくて、諸外国競合の中に坐し、なんらなすところなければ、やがていくばくもなく国は衰亡していくだろう。」<sup>①</sup>と書いて

<sup>①</sup>吉田松陰. 幽囚録[M]. 第1巻, 134.

いる。近代以降、欧米帝国主義を模倣して拡張を行うために、日本はこの伝統文化資源を統合・利用し、その拡張主義者は歴史的伝統を継続した近代の産物として促し、近代の侵略思想と前近代の拡張伝統を合わせ、アジア隣国への武力拡張には「近代の合理性」だけでなく、「伝統的合法性」も備えてきた。

### 3.2 「皇民化」政策

「皇民化」政策とは、太平洋戦争時代における、日本が東南アジア各地を占領していくにあたり、統一的に支配するために、日本民族との同化を行った政策を指している。「皇民」というのは天皇の民を指し、いわゆる日本人のことを指している。つまり、日本が支配した国の人々を日本人化する政策という意味なのである。

当時の日本は「大東亜共栄圏」と呼ばれる思想が広がっており、その内容は欧米におけるアジア地域の植民地解放を目的とし、日本とアジアが共存するための新たな秩序を作るというものである。「皇民化」政策は「大東亜共栄圏」構想によって生まれたといえる。盟主となる日本は植民地への同化の当然という考えがあったのである。

1936年に日本が南進政策を決定してから、第二次大戦が終わった1945年まで、日本の台湾での植民地支配は別の段階に進んだ。この時期は戦争の必要により、日本内地の経済は泥沼化し、全国は次第に戦時体制に入り、大東亜戦争を発動し、国力の消耗は非常に大きく、人力、物資力は非常に貧しく、台湾の協力が必要であった。本来許されていた社会運動を廃止するほか、台湾人の民族意識を精神的に除去し、生活上は漢民族や台湾先住民の生活形態と文化から離れ、皇民化運動を全力で推進し、台人の全面的な日本化を提唱し、台湾人を戦時工作に全面的に動員する必要がある。1945年に第二次世界大戦が終わって日本が降伏するまで続いた。この時期は「皇民化時期」と呼ぶことができる。

「皇民化運動は2段階に分けて行われる。第一段階は1936年末から1940年までの『国民精神総動員』であり、重点は時局に対する認識を確立し、国民意識を強化することにある。」<sup>①</sup>様々な思想宣伝と精神動員を通じて、台湾人の

<sup>①</sup> 陈星. 台湾主体意识的概念性解析[J]. 台湾研究集刊, 2009(4): 17.

祖国觀念を消滅することに力を入れ、大日本臣民思想を注ぎ込んだ。「第二段階は 1941 年から 1945 年までの『皇民奉公運動期』であり、主は日本皇民思想を徹底的に実行し、台湾人を大日本帝国に忠誠を尽くすことを目的としている。」<sup>①</sup>

台湾総督府は皇民化運動を推進するために、台湾人に国語(日本語)を話すこと、着物を着ること、日本家屋に住むこと、台湾民族信仰を放棄し、日本の神道を改宗して神社に参拝することを強く要求するとともに、日本の天皇を毎日拝むようになった。また、総督府も 1940 年に氏名変更法を公布し、廃漢姓を日本名に変更する運動を推進した。「国語家庭」<sup>②</sup>は特惠を受け、政府機関が優先的に任用され、食べ物の配給が多く、子供も進学競争で優位に立っている。「日本人の配給量は台湾人よりも多いが、日本の名字に変更した台湾人も、一般の台湾人よりも多くの配給を受けている。」<sup>③</sup>しかし、「台湾の皇民化政策の強制性は、日本が朝鮮で実行している皇民化政策よりもはるかに低い。最後に、戦争規模が拡大しているため、必要な兵員が増えており、日本当局も 1942 年から台湾で陸軍特別志願兵制度、1943 年に海軍特別志願兵制度、1945 年に徴兵制を全面的に実施している。」<sup>④</sup>

台湾史研究所の研究員によると、「日本は 1937 年に中国を全面的に侵略し、台湾人の漢人意識の覚醒を防ぐために『内台如一』<sup>⑤</sup>を高らかに歌った。つまり台湾人も天皇子民と日本内地人のように平等である。そこで大戦中に皇民化運動を歌い、台湾人に日本姓を変えたり、日本語を話したり、日本の神を拝したり、中国の神様を祭ったりしてはいけないなどと思っていましたが、実際には少ない土紳が改姓しました。そのため、皇民化運動は日本語を話すことが成功した以外の成果はかなり限られており、台湾人が日本人に同化された貴紳階級は 1%しかなかった。」<sup>⑥</sup>

ほとんどの朝鮮人は被治者とすることに反感を持っているため、統治される

①陈星. 台湾主体意识的概念性解析[J]. 台湾研究集刊, 2009(4): 18.

②いつも日本語を使用する家庭である。

③石勇. 台湾主体意识的建构及危害 [J]. 台湾研究, 2017, 30-35.

④『台湾人志願兵制度の件について』、陸秘第 990 号。昭和 12 年 9 月 7 日。外務省東アジア局：「昭和十三年度執務報告」第二冊。

⑤石勇. 台湾主体意识的建构及危害 [J]. 台湾研究, 2017, 30-35.

⑥顔庆祥. 教科书政治意识形态分析[M]. 台北：五南图书出版社，1997. 36.

時期は終了後、日本が推進した政策の大部分は廃止されたが、例えば、日本総督府は明治維新後のやり方で端午節(同時に日本の子供の日)を新暦5月5日に変更した影響がある。大韓民国成立後、旧暦の端午の節句に合わせて回復しましたが、新暦の5月5日を子供の日としました。皇民化政策は、日本が朝鮮人を「皇国の臣民」にするため、すなわち天皇に忠誠を尽くす日本国民となるために推進する政策であり、朝鮮人に対して戦争総動員を実施し、日本による侵略戦争に参加することを目的としている。朝鮮総督南次郎は「内鮮一体は統治の最高指導目標である」と言った。「日本は対中侵略規模を拡大し、戦時体制を正式に推進しているが、日本人の力だけで戦争に対応するのは大変であるため、朝鮮人を戦争に動員する必要がある、できるだけ朝鮮人を自発的に戦争に参加させるためには、『内鮮一体』<sup>①</sup>すなわち日本の『内』と朝鮮の『鮮』が全体となっていることを何度も強調している。」<sup>②</sup>毎日正午、朝鮮人は何をするにも、日本の天皇のいる東京に向かって深く頭を下げなければならない。すべての学校の学生は毎日運動場に集合し、日本の皇居のある東方に巡礼し、「皇国臣民の誓い」を暗唱し、「内鮮一体」を徹底的に達成するために、日本当局はすべての朝鮮人が日本語を使えるように教育し、学校では朝鮮語を教えなくなった。1942年に本格的に日常生活で日本語を使用するようになり、1940年から日本は朝鮮人の名前を日本の名前に変更しなければならないことを強制した。つまり、植民地支配と「大東亜聖戦」のために、日帝は苦心して「皇民化」政策を打ち出し、朝鮮族人民の民族コンプレックスを徹底的に断ち切り、朝鮮民族を徹底的に改造しようとしたが、効果はわずかで、これまで期待した目標を達成したことがなかった。朝鮮族人民は日常生活の中で依然として自分の言語文字を使用しており、民間の生活習慣、祭祀信仰、祭り活動の中でも伝統的な民族固有の文化を踏襲しているため、真の「創氏改名」は、「皇風生活」を送る人は少ない。

### 3.3 侵略の正当化されることのごまかし

<sup>①</sup>石勇. 台湾主体意識の建构及危害 [J]. 台湾研究, 2017, 30-35.

<sup>②</sup>朴慶植. 天皇制と朝鮮[M]. 神戸: 学生青年センター, 1989. 38.

日本右翼は日本が第二次世界大戦において、自分の安全を守るために戦争を起こしたと称し、アジア太平洋戦争は日本の生存を守るために行わざるを得なかった「自衛戦争」である。

「国土が狭い」、「人口過剰」を侵略「理由」としたほか、歴史の必然性において、歴史の特異性において、さらにその文化の使命において、日本民族の大陸が発展し、宿命的な事実である」と説くような「文化的使命」を侵略する暴論を作っている人もいる。「日本の使命」については、「従来、大東亜の諸文化は、印度も支那もその精髄を失はずして日本の中に集積され、日本に於いて醒醸され、培養された。その限り日本はアジアを代表する。但しそれは従来内包的になされることが多かつた。併し現在それは外延的にもなされなければならぬ。日本に集中するだけでなく、より多く日本から東亜に向って、更に世界に向って発展されねばならぬ。大東亜共栄圏の建設はさし当つての任務である。特にこのことはヨーロッパ文明との対決に於いて日本に諫せられた使命である。即ち単に物の文化体系でなく、魂の文化体系が創造されなければならないのである。大東亜共栄圏を完成し、絶対者に面した魂の文化体系を構成する。そこに日本の使命があるのである。」<sup>①</sup>とされている。ここでこのような「使命」思想が敷衍され、日本はアジアの集約点であるとともに、ヨーロッパ文明に代わるべき新たな文化の出発点とされているのである。

1934 年、日本陸軍省は「国防の本義と国防強化の提唱」と題するパンフレットを作成し、侵略戦争を扇動し、個人にとっては「試練」、国家に対しては「生存競争」である。櫻井新は「侵略戦争というよりも、ほとんどのアジア諸国がおかげでヨーロッパの植民地支配から独立した結果、教育もかなり普及し、半世紀でアジア全体が経済繁栄の勢いを見せ、彼らの民族を強大化させただけだ」<sup>②</sup>と宣言した。終戦 50 周年の国会議員連盟は「設立意向書」に「日本の今日の平和と繁栄は 200 万人以上の戦争殉難者に基づいている」と書いている。「これらの殉難者たちは、日本の自存自衛とアジアの平和を願うために尽くす」<sup>③</sup>と述べた。

<sup>①</sup>吉田孝. 日本の誕生[M]. 東京: 岩波書店, 1997,28.

<sup>②</sup>林庆元. 杨齐福. 大东亚共栄圏の源流 [M]. 北京: 社会科学文献出版社, 2006.213.

<sup>③</sup>林庆元. 杨齐福. 大东亚共栄圏の源流 [M]. 北京: 社会科学文献出版社, 2006.205.

このような侵略戦争を「アジア解放」戦争と美化することにも、その直接的な源は日本のファシスト理論家である大川周明が1920年代から40年代初めにかけて最初に提唱した「すべての民族を圧迫から解放する」であり、日本の指導の下で「大東亜共栄圏」の主張を進めている。これは日本帝国主義が世界を制覇する植民地拡張計画である。最初、日本は「東亜新秩序の建設」を提案し、拡張範囲は中国に限られており、英米の中国勢力を排除し、中国を独占することを目的としていた。「東亜新秩序」の実質は、中国を日本の植民地にし、第二次世界大戦全面勃発後の日本が英米の欧州での不利な状況を転換し、南進が英仏荷などの東南亜での植民地を奪取しようと画策することである。1940年、日本近衛内閣は「基本国策要綱」で正式に「共存共栄」の主張を提出し、日本は皇国を中心とし、日、満、華の強国結合に基づく「大東亜新秩序」を確立し、大東亜全体を含む経済協同圏を確立すると述べた。

「皇国史観」によって、日本が世界を支配し、中国を復興させ、アジアを復興させることができるだけであり、明治天皇の大日本帝国の夢を実現するために、いわゆる「八紘一宇」の第一歩が「大東亜新秩序」を「大東亜共栄圏」に変更するという意味は同じである。ただそれに続いて、明確に「大東亜共栄圏」を戦争の目的とし、それを「肇国の精神」の継承とすることは、もちろん日本の現行の国策となっている。1940年7月26日の「基本国策要綱」によると、「皇国の国是は八紘を一字とする肇国の大精神に基き世界平和の確立を招来することを以て根本とし先づ皇国を核心とし日満支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設するに在り之が為皇国自ら速に新事態に即応する不拔の国家態勢を確立し国家の総力を挙げて右国是の具現に邁進す。」<sup>①</sup>つまり天皇は世界の支配者であり、全世界は一家となり、天皇の支配を受けている。

「八紘一宇」は日本の侵略拡張政策の究極の目標であり、もはや「理想」ではなく、実質的な覇権統治である。

<sup>①</sup>1940年7月26日、第2次近衛内閣によって決定された国家の政策の基本方針で、その後の日本の進路を定めたもの。その内容は、ファシズム諸国による世界再分割を世界史上の必然的動向とし、従来の東亜新秩序よりもさらに広大な大東亜新秩序の建設を日本の国是であるとしている。



## 4 「大東亜共栄圏」政策の崩壊及び「皇国史観」の反動性

### 4.1 「大東亜共栄圏」政策の実質

「大東亜共栄圏」政策とは、中国や東南アジア諸国を欧米帝国主義国の支配から解放し、日本を盟主に共存共栄の広域経済圏をつくりあげるという主張であり、抗日戦争期に日本の対アジア侵略戦争を合理化するために唱えられたスローガンである。大東亜の理念は古く、その理念は『国史概説』<sup>①</sup>における存在し、以下のように説明されている。

「わが国は、神勅に基く万世一系の皇室を中心に、八紘為宇なる肇国の大理想を、着々その歴史を通じて実現拡充して来た。上古に於ける帰化人の愛撫や朝鮮半島の経営などは、そのよき例である。特に明治維新以後、日本の国力が進展すると共に、皇化は次第に対岸の半島より大陸にのび、更に広く全東亜諸民族に覚醒の気運を促し、以て大東亜戦争に及んだ。是に於いて肇国の大理想は、応々大東亜共栄圏建設といふ現実的使命を帯びるに至り、東亜十億の民衆は遂にこの共同の理想に向って団結邁進することになった。されば大東亜史はかかる意味に於いて、大東亜諸民族の自覚への歴史であるが同時に大東亜共栄への歴史であり、それはまた実に八紘為宇の大精神顕現の歴史であるといふことが出来るのである。」<sup>②</sup>

革新派右翼思想家の大川周明は、アジア各国の平等協力を主張する「古典亜細亜主義」思想と、日本のアジア侵略の「大陸政策」、「大東亜共栄圏」政策を合わせてしている。これは理論的な混乱するだけでなく、一部の日本人が今もいわゆる「大東亜戦争」を「道義」<sup>③</sup>と見なしている。「大東亜共栄圏」という言葉は、近衛内閣の松岡洋右外相が最初に使った。1940年8月1日、日本の外交方針について「皇道精神に基づいて、まず大東亜共栄圏を確立する

<sup>①</sup>『国史概説』の編纂事業は、1941年度文部省所管追加予算の決定をもって開始された。1941年2月12日、第76回帝国議会衆議院予算委員会において、橋田邦彦文相は「国民ヲシテ皇国民タルノ信念ト、使命トヲ一層自覚セシメマス為メ、国史ヲ編纂セント致シマス」と述べている。

<sup>②</sup>渡辺治、国体[M]、東京：岩波書店、177-182。

<sup>③</sup>人のふみ行ふべき正しい道「道義にもとる行為」「道義的責任」後で初めて大川周明に使用された。



」<sup>①</sup>と述べた。つまり「大東亜共栄圏」政策の建設は日本の「皇道外交」の具体的な現れである。1942年2月16日、東条英機首相が国会演説で「大東亜戦争の目標は、大東亜諸国、各民族が皇国を中心に、道義に基づく共存共栄の新秩序を確立することである」<sup>②</sup>と述べた。「大東亜共栄圏」政策は、民間理想主義としての「亜細亜主義」の自然発展ではなく、「大陸政策」の自然な延長であり、日本政府の現実主義的な追求である。近代日本のアジア戦略のテーマはいくつか変化し、最後に「大東亜共栄圏」という言葉に位置づけられ、大東亜共栄圏は大陸政策と脈々と受け継がれている。「興亜」、「共存共栄」、「アジア解放」とは完全に不実のスローガンである。日本の「南進」の目的は、米国の封鎖を打破し、日本に必要な「物質」を取得し、太平洋における日本の覇権的地位を保証することである。日本が「アジア解放」を掲げているのは、侵略行為を合理化し、国内の人々をだまし、安く行動する目的を達成しようとしているからだ。「大東亜共栄圏」政策のすべての内容が「皇国史観」につながっており、「皇国史観」の指導下での対外侵略拡張の具体的な現れといえる。

## 4.2 「大東亜共栄圏」崩壊の象徴

ますます不利になってきた戦局は日本の各地での植民地の支配を徐々に崩壊させたため、「大東亜会議」も「大東亜共栄圏」政策の崩壊の前奏であった。1943年1月28日、東条首相は、「四三年中のビルマ独立、フィリピンについても速やかに実現を期待する」、と宣明していた。5月31日、「大東亜政略指導大綱」（御前会議決定）は、ビルマ、フィリピン両国を独立させることを決定した。「そもそも『大東亜会議』（四三年一月六日『大東亜宣言』）は只一度開かれたのではなく、都合二回開催されている。第二回『大東亜会議』は戦局の困難性に伴ない、『大東亜大使会議』として四五年四月二三日に開催された。」<sup>③</sup>同第二回会議は、「植民地民族の解放」をメイン・テーマとして全世界に訴えるものであった。

二回にわたる「大東亜会議」の様子は、枢軸国及び中立国のメディアを通じ

<sup>①</sup>太平洋戦争勃発前、外務大臣松岡洋右は第二次近衛声明に提出の方針。

<sup>②</sup>1943年11月5日から6日まで東京で開催された「大東亜会議」で、「共同宣言」を発表した。

<sup>③</sup>外務省編『終戦史録2』北洋社、1977、181。

て全世界へ広く発信された。「戦後」(連合国の戦勝後)、ヨーロッパ国際法における東南アジア植民地の「国家独立承認」問題が、世界的議論となることは避けられなかった。アジア、アフリカにおける植民地の独立(英領ビルマ、及び米領フィリピンがその模範となる)が、一旦、「国家主体」として、既存の独立国家(ヨーロッパ国際法の定義による。枢軸側のヨーロッパ諸国が国家承認に参加したことも含めて)によって正式な「国家承認」を受けた場合(上述して来た)、その「国家」をもう一度旧宗主国側が旧来の植民地(属領)の地位に引き戻すことを、国際法は法的に許すだろうか？

第一回の大東亜会議を主催した外務大臣は重光葵(首相は東條英機)であった。東條首相は重光に第一回「大東亜会議」を取り仕切らせるために、四三年四月に内閣をわざわざ改組して重光葵を入閣させ、半年の準備期間を彼に与えたとも言えるのである。その後、東條内閣を四四年七月に引き継いだ小磯内閣としても、「大東亜政策は不変」(「大東亜宣言」徹底具現!)との立場を掲げていた。小磯はその組閣において、外相の他に大東亜相も重光に兼務させた程であった。

第二回「大東亜大使会議」は東郷茂徳外相(鈴木貫太郎内閣)によって開催された。同会議に出席した面々は、日本以外には、王・満州国大使、果・中華民国大使(南京)、ウィチット・タイ国大使、ティ・モン・ビルマ大使、ヴァルガス・フィリピン大使等の大東亜諸国大使、それに自由インド暫定政府代表のラーマ・ムルティであった。その会議は以下の二項の決議であった。

「第一決議はウィチット・タイ国大使から提案された。ウィチットは、インドシナ(仏印)を構成する三国(安南、カンボジア、ルアンパバーン)の独立支援を提案した。第二決議は、ヴァルガス・フィリピン大使から提案された。ヴァルガスは、蘭領インドに対する独立支援決議を提案した。」<sup>①</sup>その他の決議も見れば、第三決議は大東亜会議を常設連絡機関化する決議、第四決議は自由インド暫定政府に、本大東亜大使会議の決定を通知する、と言う決議であった。また、「同『大東亜大使会議』は、同時に以下の『共同声明』を発表した。その内容は今後の世界における、あるべき国際関係を律する原則を提言したもの

<sup>①</sup>「大東亜戦争関係一件・ビルマ問題、各国承認問題」前掲文献。

であった。」<sup>①</sup>「1. 政治的平等、2. 国家の独立尊重並び内政不干涉、3. 植民地民族の解放、4. 経済的平等互惠、5. 文化交流、6. 侵略防止、7. 大国専制の排除、並び画一的世界平和機構の打破。」<sup>②</sup>

「大東亜会議」は日本が指導し、各国が協力して演出する茶番劇である。会議に参加した各国、偽満州国、汪偽政權、自由インド臨時政府は、国際的に一般的に認められていないため、アジア諸国の立場を代表することはできない。

「大東亜会議」は日本主導で開催され、会議開催時間、場所、テーマの決定から具体的な流れ、発言内容まで、すべて日本が手配している。1943 年 11 月 3 日、事務局議場部議事班は「議事に関する発言姿勢」という文書を作成し、各国の発言順序、提案内容、さらには 1 文ごとに動作表情を詳細に説明し、丁寧な「脚本」とした。会議当日も確かにこの「シナリオ」通りに行われていた。

「また、会議には実質的な内容はなく、基本的には各国の日本に対する称賛と忠誠を力表している。日本が日増しに悪化する戦争情勢に直面して内外をなだめようとしたあがきと努力である。戦争勝利が連合国側に偏っていくにつれて、日本はその植民地支配下の東亜地域の力を統合して戦争に利用しようとしている。」<sup>③</sup>また、日本は国内のパニック心理と厭戦感情をなだめるために、大東亜地域で各国の支持を失っていないことを示す会議を開催した。

「大東亜会議」が示したように、太平洋戦争勃発後、日本は「大東亜共栄」を鼓吹し、各国の独立を支援しながら、日本を中心に、すべて日本に奉仕する戦争需要を強調した。この矛盾は「大東亜共栄圏」の侵略の本質を表している。

「大東亜共栄圏」政策とは有名無実であり、その矛盾と分裂は必然的に存在し、日本が鼓吹する「共存共栄」もペテンにすぎない。

日本は「大東亜会議」を開催することで不利な戦局を救い、「大東亜共栄圏」政策を維持しようとしている。しかしそれに反して、「大東亜会議」はまさに「大大東亜共栄圏」政策の崩壊の前奏であった。戦局がほぼ決まった場合、日本は「大東亜会議」によって東亜諸国の力の統合を図っているが、この「遅れた統合」、日本が軍事的な勝利を助けることはできず、連合軍が勝利し、

<sup>①</sup>「大東亜戦争関係一件・ビルマ問題、各国承認問題」前掲文献。

<sup>②</sup>「大東亜関係一件・ビルマ問題、各国承認問題」外務省外交史料館 A700, 9-39-3.

<sup>③</sup>林庆元、杨齐福、大东亚共栄圏の源流 [M].北京：社会科学文献出版社，2006.319.

1945 年 8 月 15 日、会議が終わってから 2 年もたたないうちに、日本は降伏を宣言した。日本の敗戦も「大東亜共栄圏」政策の徹底的な崩壊を宣言した。

### 4.3 皇国史観の反動性

「皇国史観」は、戦時下「皇国史観」を理論とするアジア諸国蔑視による対外戦争を発動し、戦争を支える超国家主義的日本史観であり、深い反動性を持っている。「皇国史観」という語が、今日用いられているような批判的な意味で用いられるようになったのは、戦後すぐからのことである。

1945 年の敗戦直後より、歴史学界では新しい学会の組織や雑誌の創刊の動きが始まる。まず、1945 年 11 月 1 日には京都で日本史研究会が創立され、1946 年 5 月に機関誌『日本史研究』が創刊された。また、1946 年 1 月 12 日には民主主義科学者協会(民科)が結成されており、その歴史部会の機関誌として『歴史評論』が 1946 年 10 月に創刊されている。1944 年から活動を停止していた歴史学研究会(1932 年 12 月創立)も、1945 年 11 月 10 日・12 月 1 日に「国史教育再検討座談会」を開催し、さらに 1946 年 1 月 27 日に再建大会、3 月 10 日に総会を開いて活動を再開、1946 年 6 月に機関誌『歴史学研究』を復刊させている。この他にも、日本歴史社の『日本歴史』(1946 年 6 月創刊、1949 年 3 月より日本歴史学会の機関誌となる)などもこの時期に創刊されている。これらの学会や雑誌に集った人々の思想は必ずしも一様であったわけではないが、そこにはほぼ 共通して、戦時下の歴史学・歴史教育の状況に対する強い批判意識が見られた。そして、こうした一連の動きの中で、主として講座派マルクス主義の影響を受けた若手の歴史学者を中心として、いわゆる「戦後歴史学」が形成されてゆくことになる。

このうち日本史研究会は 12 月 23 日に第 1 回例会を開いているが、そこで行われた座談会において、同会創立委員の一人である藤谷俊雄(1912- 95)は、戦時下の歴史教科書を批判して、以下のように述べている。

「根本的にはこの日本の歴史を非常に神秘的に考へるやうな考へ方が、この戦争中には横行したことは、皆さんよく後承知の事だと思ふのである。

或は二千六百年説、或は八紘一字説まあかう言ふ風なものが非常に喧ましく取立てられまし、この小学校の教科書或は中等学校の教科書に盛られた。此の所謂皇国史観が行はれてゐるだけでなしに、もつと極端な軍国主義史観或は進んで米英打倒史観と言ふやうなものがこの歴史教科書の基調である」<sup>①</sup>

また、当時暁星中学校の教諭で、のちに歴史教育者協議会(歴教協、1949年7月設立)の委員長となる高橋磯一(1913 - 85)は、『歴史評論』の1947年9月号で、暁星中の五年生たちが同年の一学期末に書いた、文部省著作中等学校教科書『日本の歴史』(1946年)についての批判的レポートを紹介しているが、その中には「我我はこの教科書を見る迄は『大日本は神国なり』の皇国史観とかいうものを信じさせられて来たという文言が見られる。」<sup>②</sup>こうした記事からも明らかなように、「皇国史観」とは戦時中に肯定的な意味合いで用いられ、喧伝されていた言葉であり、それが戦後になって、戦時下の歴史学・歴史教育が軍国主義や対外侵略に加担したとして批判されるようになる中で、その歴史観を示す語として批判的な意味で用いられ始めたのである。いわゆる戦後歴史学が、戦前・戦時中の歴史学の状況に対する強い批判意識から出発していることは確かであるし、そのことはきちんと評価されなければならないであろう。また、戦後歴史学(の基軸となったマルクス主義史学)を、それが政治的であるという理由で「皇国史観」と安易に同列視することは問題であり、かえって「両者の歴史的個性を内在的に明らかにすることを不可能することになる。」<sup>③</sup>とはいえ、批判の構図に問題があったことと、歴史学という学問それ自体の戦争責任の追求があいまいなままに終わってしまっていることは、やはり問題として指摘されなければならない。

日本帝国主義の対外侵略、戦争、他民族の支配については、「『皇国史観』は『トライバリズム』の立場に立って肯定と称賛され、神武天皇東征の神話から近現代史における対外侵略まで、『皇国史観』が崇拜されているからこそ、他民族の独立を侵害する不正当性を正確に認識することはできず、『皇国史観

<sup>①</sup>『昭和十八年十一月以降錬成會要項綴』(教学錬成所、国立教育政策研究所蔵)。

<sup>②</sup>『昭和十七年六月二十二日 高等師範学校長、高等学校長、専門学校長、實業専門学校長會議ニ於ケル橋田文部大臣訓示要領』(国立教育政策研究所蔵)。

<sup>③</sup>『文部省職員録』1941年10月1日現在(文部大臣官房秘書課)。

』は天皇制国家と日本帝国主義の存在を合理化するためのイデオロギーにすぎない。」<sup>①</sup>それは科学的客観性を排除し、主観的随意性を堅持するため、本質的に非科学的である。

---

<sup>①</sup>赵建民. 大东亚共栄圏的历史和现实思考[J]. 世界历史, 1997(03).11-19.



## おわりに

1931 年以後の対外侵略の進行過程で、日本の「国体」を擬似普遍化し、あらゆる国家・民族を取り込んで無限に拡大することを正当化する「皇国史観」が持ち出される。日本による「満洲国」支配を合理化するため、日本の、他の諸国・諸民族を指導することを自己正当化する理念として持ち込まれたこの「大東亜共栄圏」は、1937 年の中日全面戦争の勃発にともない国是化されたのにいたる。ここに、日本の絶対の国是たる「肇国の精神」とは、「天壤無窮の神勅」に基づく「万世一系」の天皇による統治という「皇国」の理念である。日本の「国体」が、「八紘一宇」の理念に基づいて無限に拡大してゆくというものであり、また「国史」ないし「皇国史」とはその「肇国の精神」の実現過程とされることになった。このため、あらゆる歴史は一「国史」のみならず世界史に関しても一この国体観念に沿って書き直されることが要求されることになった。また、「天壤無窮の神勅」および「皇国史観」の典拠である『日本書紀』の叙述と矛盾するような歴史認識は、たとえそれがいかに日本を讃美し、あるいは異民族支配や対外侵略を正当化するようなものであっても、排除されることになったのである。日本側は歴史に対し、国民に対し、未来に責任を負う態度に基づき、中日友好を維持し、アジア地域の安定と発展を維持する大局から、慎重な態度で皇国史観が残した歴史問題を厳粛に扱い、適切に処理し、歴史の教訓を真剣に覚え、平和発展の道を堅持すべきである。





## 参考文献

### 一、中国語

- [1]复旦大学历史系编译. 日本帝国主义对外侵略史料选编[M].上海:人民出版社, 1983, 52.
- [2]信夫清三郎. 日本外交史(天津社科院日本问题研究所译) [M].北京:商务印书馆, 1980, 41.
- [3]子安宣邦. 东亚论:日本现代思想批判(赵京华编译) [M].长春:吉林人民出版社, 2004, 61.
- [4]臧运祜. 近代日本亚太政策的演变[M].北京:北京大学出版社, 2009,261.
- [5]平泉澄. 物語日本史(黄霄龙译) [M].北京: 社会文献科学出版社, 2016,2-8.
- [6]张卫娣. 浅析近代日本“尚力”对外战略理念的成因[J].日本研究, 2013.(01).58-61.
- [7]张卫娣. 日本“实力主义”对外战略理念评述[J].南京政治学院学报, 2014.(03).102-107.
- [8]刘淑梅、李箭. 论日本近代的“皇国史观” [J].大连近代史研究, 2007(00).41-52.
- [9] 林庆元. 大东亚共荣圈的源流 [M].北京: 社会科学文献出版社, 2006.216.
- [10]周新国. 日本“皇国史观”思想的演进与甲午战争[J].学术界, 2014(10).82-87.
- [11]于鹏. 试析日本右翼分子否定侵略、美化战争的原因[J].黑龙江教育学院学报, 2008(07).84-85.
- [12]刘岳兵. 皇国史观与宋代儒学的思想纠葛[J].社会科学辑刊, 2010(06).165-170.
- [13]王江鹏、王维远. 战后日本缘何美化侵略历史[J].日本研究, 1999(03).46-50.
- [14]毕世鸿. 日本“大东亚共荣圈”构想与“南方共荣圈”的幻灭[J].南开日本研究, 2019(00).159-171.
- [15]官性根. 从灵魂扭曲到军事冒险: 日本“皇国史观”的危害[J].西华大学学报, 2015.7(4).1-5.
- [16]冯玮. 从“满蒙领有论”到“大东亚共荣对日本殖民扩张主义的再认识[J].抗日战争研究, 2002(02). 84-85.
- [17]范业红. 江户时期日本学者诠释下的“华夷”观念[J].理论观察, 2014(03). 41-52.
- [18]郭丽. 日本华夷思想的形成与特点[J].日本研究论集, 2003. 84-85.
- [19]何芳川. “华夷秩序”论[J].北京大学学报, 1998(60). 53-57.
- [20]韩东育. 关于东亚近世“华夷观”的非对称畸变[J].史学理论研

- 究, 2007(03). .53-55.
- [21]吕万和. 崔树菊. 日本“大东亚共荣圈”迷梦的形成及其破灭[J].世界历史, 1839(04).32-47.
- [22]史桂芳. 日本昭和研究会与近卫内阁的对华政策[J].陕西师范大学学报, 2011(04).29-45.
- [23]史桂芳. 日本侵华战争时期的“东亚协同体论” [J].历史研究, 2015(05).36-39.
- [24]游国龙. 序列意识与大东亚共荣圈——对二战时期日本国家行为的心理文化学解读[J].日本学刊, 2013(02).57-59.
- [25]赵建民. “大东亚共荣圈”的历史与现实思考[J].世界历史, 1997(03).69-72.
- [26]黄志强. 简析近代日本对外侵略的文化因素[J].理论观察, 2007.64-66.
- [27]郑毅. 皇室・反战・神道: 吉田茂的皇国史观研究(上) [J].北华大学学报, 2005.2.(01).42-47.
- [28]郑毅. 皇室・反战・神道: 吉田茂的皇国史观研究(下) [J].北华大学学报, 2005.4(02).53-57.
- [29]米彦军. 论德富苏峰的皇室中心主义思想[J].抗日战争研究, 2007.(01)178-196.
- [30]范业红. 关于日本江户时期思想家“华夷之辨”思想演变的研究[D].东北: 东北师范大学, 2015.1-143.
- [31]乔柯. 试析日本“大东亚共荣圈”的思想根源[D].北京: 外交学院, 2018.1-54.
- [32]陈宁. 日本的历史认识及其对朝日关系的影响[D].吉林: 延边大学, 2007.1-52.
- ## 二、日本語
- [33]蠟山政道. 東亜と世界: 新秩序への論策[M]. 東京: 改造社, 1941.56.
- [34]橋川文三、松本三之介. 近代日本思想史大系[M]. 東京: 有斐閣, 1970.23.
- [35]松岡洋右. 皇道外交宣言 [M].東京: 日本国際協会, 1941.73.
- [36]エス・ピー・ピー. 大東亜共栄圏の時代: 興亜を目指した日本とアジアの歴史[M]東京: 政治経済研究会, 2006.75.
- [37]平泉澄. 悲劇縦走[M]. 東京: 皇学館大学出版部, 1980.67.
- [38]昆野伸幸. 近代日本の国体論—皇国史観再考. [M]東京: ペリカン社, 2007.82.
- [39]阿部猛. 皇国史観[M]. 東京: 吉川弘文館, 1999.36.
- [40]田中卓. 平泉史学と皇国史観[M]. 東京: 青々企画、2000.82.
- [41]河原宏. 日本人のアジア観——大東亜共栄圏の思想と政策[J]. 社会科学討究, 1975.3.
- [42]今谷明. 平泉澄の皇国史観とアジール論[J].創造の世界, 1995.155-162.

- [43]田中卓. 皇国史観、何か悪い[J]. 神社新報, 1968.8.31.
- [44]山口宗之. 平泉澄博士における天皇[J]. 歴史学・地理学年報, 1986.72-84.
- [45]近衛文磨. 満州事変六周年に際して[J]支那, 1937.9.
- [46]坂井雄吉. 近衛と明治三十年代の対外硬派[J]. 国家学会雑, 1970.42-49.



## 致 谢

这篇论文从选题到初稿完成，得到了太多老师的帮助。最应该感谢的是我的导师张卫娣教授，在张老师一步步的启迪和指导下，从选题开始的一头雾水到思路渐渐清晰，从提纲拟定到初稿完成，张老师给了我许多宝贵建议。

同时还要感谢日语教研室的其他老师给我的耐心指导。在每一次的研讨会上都能得到老师们宝贵的建议，可以说，没有这一次次的研讨，这篇论文就不会顺利的完成。借此机会，我还要向我的家人表示由衷的感谢，他们在生活和精神上给予我的支持让我得以全身心的投入学习中，感激之情无以言表！

三年的研究生学习生活即将结束，依然记得刚入校时各位老师对我的鼓励和指导带给我的温暖心情。我将会永葆初心，带着这份美好的心情，认真对待以后的生活和工作。

路红燕

2022 年 5 月 16 日



## 攻读学位期间的研究成果

[1]路红燕，张卫娣.文化视角下日语语言文化特点研究——“以心传心”[J].科教导刊，2021(27):229-230.